



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

令和3年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」(通称：おんかつ)を実施しています。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、この事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

令和3年度は、14団体で実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により6団体で中止(うち1団体は令和4年度に延期)となり、8団体での実施となりました。

この報告書は、8団体との共催により実施された「令和3年度公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しています。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいたアーティスト、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、令和3年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は令和3年度のものです〉

第1部 令和3年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター／実施団体	3
全体研修会実施概要	5

第2部 令和3年度公共ホール音楽活性化事業 事例紹介・レポート

〈導入〉	
大槌町 (岩手県)	8
横手市 (秋田県)	13
大館市 (秋田県)	19
会津美里町 (福島県)	25
町田市 (東京都)	32
北杜市 (山梨県)	39
日高川町 (和歌山県)	44
中間市 (福岡県)	49

第3部 令和3年度公共ホール音楽活性化事業 コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	56
丹羽 徹 (コーディネーター)	58
花田 和加子 (コーディネーター)	60
山本 若子 (コーディネーター)	61
赤木 舞 (コーディネーター)	62
仕田 佳経 (コーディネーター)	64
大澤 寅雄 (アドバイザー)	66

第4部 令和元・3年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要	70
派遣アーティストプロフィール	77
レポート	82
小市 尚美 (事業担当者)	82
山本 若子 (チーフコーディネーター)	84
唐谷 裕子 (コーディネーター)	85
山本 若子 (コーディネーター)	87
楠瀬 寿賀子 (コーディネーター)	88
新崎 洋実 (アシスタントコーディネーター)	90
大塚 貴雄 (アシスタントコーディネーター)	92
金丸 寛 (アシスタントコーディネーター)	94

第1部
令和3年度公共ホール
音楽活性化事業（おん
かつ）の概要

令和3年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムとホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

- (1) 実施団体 8団体（新型コロナウイルス感染症の影響により、14団体のうち6団体が中止（うち1団体は令和4年度に延期）
※市町村（特別区を含み、政令指定都市を除く。）及び指定管理者等。
- (2) 研修事業 ①全体研修会
令和3年4月19日（月）～21日（水）／（一財）地域創造、トッパンホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修。
※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、実施団体はオンラインにより参加。
②個別研修の実施
広報を始める前の段階（公演2,3カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。
- (3) 公演事業 公演事業の実施（全国8地域） 令和3年10月～令和4年3月
登録アーティストと共演者を地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサート及び地域交流プログラムを実施した。
- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| ① コンサート | 身近で、親しみのあるクラシック演奏会 |
| ② 地域交流プログラム | 出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム |

3 経費負担

- (1) 一般財団法人地域創造が負担する経費
- ①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費
（演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く。）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家）、演奏家派遣に関するマネジメント料）
 - ②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費（限度額10万円）
- (2) 実施団体が負担する経費
一般財団法人地域創造が負担する経費以外の経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等
共 催：一般財団法人地域創造
制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

令和3年度公共ホール音楽活性化事業 登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 令和2－4年度登録アーティスト

齊藤 一也	(ピアノ)	株式会社東京コンサーツ
石上 真由子	(ヴァイオリン)	株式会社プロ アルテ ムジケ
梅津 碧	(ソプラノ)	株式会社1002
竹多 倫子	(ソプラノ)	株式会社二期会21
新野 将之	(打楽器)	株式会社東京コンサーツ
高橋ドレミ & 實川風	ピアノデュオ (ピアノデュオ)	MIYAZAWA & Co.

2 コーディネーター

小澤 櫻作	(上田市交流文化芸術センター プロデューサー、平塚文化芸術ホール開館準備アドバイザー、竹田市総合文化ホール グランツたけた チーフプロデューサー)
丹羽 徹	(一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事・事務局長)
花田 和加子	(keynote 代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子	(有限会社 N.A.T 取締役)
赤木 舞	(昭和音楽大学、武蔵野音楽大学他 講師)
仕田 佳経	(東京藝術大学音楽学部 准教授)

3 サブコーディネーター

菊地 俊孝	(一般社団法人日本民間公益活動連携機構 プログラム・オフィサー)
三浦 幸恵	(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 音楽制作担当)
桜井 しおり	(ワークショップデザイナー、ピアニスト)
佐野 秀典	(作編曲家、(公財) 東京都交響楽団 ほか)
佐藤 良子	(芸術文化観光専門職大学 研究支援コーディネーター)

4 アドバイザー

大澤 寅雄	(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室)
-------	-----------------------------

5 アシスタント

浅野 洋介	(公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団芸術振興課せんがわ劇場制作係)
栄 咲季	(フリーランス (東京芸術劇場 事業第一係 業務委託))
古橋 果林	(音楽ワークショップ・リーダー／ファシリテーター、 東京藝術大学国際芸術創造研究科 教育研究助手)

6 実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	アーティスト	コーディネーター
1	東京都	町田市 (まちだし)	一般財団法人町田市文化・国際交流財団	和光大学ポプリホール 鶴川	2022年10月 27日(水) ～10月29日 (金)	竹多 倫子	花田 和加子 浅野 洋介
2	秋田県	大館市 (おおだてし)	一般財団法人大館市文教振興事業 団/大館市教育委員会	ほくしか鹿鳴ホール	2022年10月 28日(木) ～10月30日 (土)	高橋ドレミ & 貫川風	仕田 佳経 柴 咲季
3	秋田県	横手市 (よこてし)	横手市	横手市ふれあいセン ターかまくら館	2022年12月 2日(木) ～12月4日 (土)	石上 真由子	小澤 櫻作 佐藤 良子
4	福島県	会津美里町 (あいづみさとまち)	会津美里町	会津美里町じげんホール	2022年12月 2日(木) ～12月4日 (土)	齊藤 一也	丹羽 徹 柴 咲季
5	岩手県	大槌町 (おおつちちょう)	一般社団法人おらが大槌夢広場	大槌町文化交流セン ター	2022年12月 3日(金) ～12月5日 (日)	新野 将之	山本 若子
6	山梨県	北杜市 (ほくとし)	北杜市	高根ふれあい交流ホール	2022年12月 9日(木) ～12月11日 (土)	齊藤 一也	赤木 舞 佐野 秀典
7	和歌山県	日高川町 (ひだかがわちょう)	日高川町	日高川交流センター	2022年2月 16日(水) ～2月17日 (木)	梅津 碧	仕田 佳経 桜井 しおり
8	福岡県	中間市 (なかまし)	公益財団法人中間市文化振興財団	なかまハーモニーホール	2022年3月 11日(金) ～3月13日 (日)	新野 将之	花田 和加子 古橋 果林

※令和3年度におんかつ(導入プログラム)の実施を予定していた市町村のうち、大分県宇佐市は、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和3年度へ延期。秋田県羽後町、埼玉県川越市、山梨県韮崎市、鳥取県境港市、山口県岩国市は中止。

令和3年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会実施概要

1 概要

令和3年度の実施団体担当者を対象として、1日目は当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを、2日目は登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションを、最終日はグループに分かれて企画検討会議及び発表を実施した。新型コロナウイルス感染症対策のためすべてオンラインで実施した。

2 参加者

令和3年度事業実施団体 担当者

3 日程

令和3年4月19日（月）～21日（水）（3日間）

4 会場

4月19日（月）、20日（火）午前、21日（水）：一般財団法人地域創造 会議室

4月20日（火）午後：トッパンホール

※実施団体はオンラインにて参加

5 実施団体研修スケジュール

4月19日（月）

時間	会場：地域創造 会議室
13:00～13:10	開講式・オリエンテーション
13:10～14:40	ワークショップ セレノグラフィカ_隅地 茉歩、阿比留 修一（ダン活支援登録アーティスト）
休憩（20分）	
15:00～15:30	おんかつを知る Vol. 1 ～基礎編～ 小澤 櫻作
15:30～16:00	おんかつを知る Vol. 2 ～実務編～ 地域創造
休憩（10分）	
	おんかつを知る Vol. 3 ～事例紹介編～
16:10～16:55	I.R1年度事例：後藤 和泉（氷見市）、山本 若子
休憩（10分）	
17:05～18:05	II.演奏家事例：喜名 雅（おんかつ支援登録アーティスト）、丹羽 徹、花田 和加子
休憩（10分）	
18:15～19:00	III.事業担当者の役割とは：仕田 佳経

4月20日（火）

時間	会場：地域創造 会議室／トッパンホール
9:30～11:00	おんかつから始まるホールと地域の未来 大澤 寅雄（アドバイザー）
休憩（10分）	
11:10～12:30	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 若子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
12:30～12:40	プレゼンテーションの聴き方 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 若子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経

昼食休憩・移動 (80分)	
14:00～16:50	2020-2022年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 新野 将之 (打楽器) 梅津 碧 (ソプラノ) 齊藤 一也 (ピアノ) 休憩 (20分) 石上 真由子 (ヴァイオリン) 高橋 ドレミ&實川風ピアノデュオ 竹多 倫子 (ソプラノ)
休憩 (20分)	
17:10～18:30	質疑応答 (アーティスト交流) 2020-2022年度登録アーティスト、赤木舞

4月21日 (水)

時間	会場：地域創造 会議室
10:00～12:00	グループ別企画検討 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 若子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
昼食休憩 (60分)	
13:00～15:00	企画発表～フィードバック 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 若子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
15:00～15:10	事務連絡
15:10	閉講式

第2部
令和3年度公共ホール
音楽活性化事業(おんかつ)
事例紹介・レポート

実施団体：大槌町文化交流センター指定管理者：一般社団法人おらが大槌夢広場

実施時期：令和3年12月3日（金）～令和3年12月5日（日）

出演アーティスト：新野将之（打楽器） 齋藤綾乃（打楽器）

アクティビティ

タイトル：読み聞かせボランティア「このゆびとまれ」のための
アクティビティ

期 日：令和3年12月3日（金） 17：00～17：45

会 場：大槌町文化交流センター 多目的ホール

参 加 者：幼児～小学校4年生 6人 大人1人

大槌町図書ボランティア「このゆびとまれ」を対象に行った。打楽器紹介や、各楽器を使った演奏、それぞれ雰囲気違った2曲を聴き、そのイメージを参加者同士で発表し合った。参加者に打楽器の知識を付けていただきたい想いと、「音楽には正解はない」というメッセージが込められたアクティビティとなった。子供たちは楽器の大きな音に驚いていた場面も見受けられたが、終始興味津々に参加していた。



タイトル：大槌民謡会「一心会」のためのアクティビティ

期 日：令和3年12月3日（金） 20：00～20：45

会 場：大槌町文化交流センター 多目的ホール

参 加 者：小学生～高校生7人、大人 8人

大槌民謡団体の「大槌一心会」を対象に行った。アクティビティ①の活動内容に加え、大槌一心会さんに外山節を披露して頂き、その後、新野将之さんと齋藤綾乃さんの外山節の即興演奏と、大槌一心会とのコラボレーションをした。外山節に、ビブラフォンとマリンバ、和太鼓の音色を合わせ、全員が一つになった素晴らしく新鮮なパフォーマンスとなった。出演者の皆さんは、良い交流会だったと笑顔で話していた。



タイトル：赤ちゃんとお母さんのためのアクティビティ

期 日：令和3年12月4日（土） 13：00～14：10

会 場：大槌町文化交流センター 図書館

参 加 者：親子5組 計10人（0才2人、2才1人、4才1人、6才1人）

クラフト作りでは「太鼓、バードホイッスル、カエルの鳴き声に似た楽器」の3種類を制作。子どもたちは終始楽器作りに夢中になり保護者の方と協力して楽器を作り上げていた。「うんぼーこ」の共演ではいきいきと自分で作った楽器を鳴らして楽しそうだった。

宮沢賢治作品「どんぐりとやまねこ」の読み聞かせと新野氏の音楽とのコラボでは図書館が優しい雰囲気に包まれた一つの空間となり親子共に充実された様子だった。



タイトル：未就学児と保護者のためのアクティビティ

期 日：令和3年12月4日（土） 15：00～16：10

会 場：大槌町文化交流センター 図書館

参加者：親子5組 計12人（3才3人、6才3人、8才1人）

クラフト作りでは「太鼓、バードホイッスル、カエルの鳴き声に似た楽器」の3種類を制作。子どもたちは終始楽器作りに夢中になり保護者の方と協力して楽器を作り上げていた。「うんぽーこ」の共演では自分で作った楽器を誇らしげに鳴らして楽しそうだった。

宮沢賢治作品「どんぐりとやまねこ」の読み聞かせと新野氏の音楽とのコラボでは笑い声溢れる回となり親子共に満足された様子だった。



コンサート

タイトル：魅惑の新世界へようこそ！～おと・ことば・いのり～

期 日：令和3年12月5日（日） 14：00～16：00

会 場：大槌町文化交流センター 多目的ホール

参加者：82人（うち高校生以下：12人）

一部では「おと」をテーマとし、様々な打楽器の紹介。二部では「ことば」をテーマとし、読み聞かせ団体の「このゆびとまれ」さんとのコラボレーションで宮沢賢治の作品が演奏された。三部では「いのり」をテーマとし新野将之さんの祈りが込められたバッハのシャコンヌ二短調等が演奏された。コンサートは笑いあり、涙ありで観客とステージが一体化したような感動的な空間だった。お客様からもたくさんの感動のお声を頂いた。



① 応募の動機・事業のねらい

施設の指定管理者となって2年目となるが、コンサート企画のノウハウがまったくないこと。また当施設は予算の関係上、自費でのコンサート企画は現実的に厳しい状況であることから、貴財団のプログラムを応募させていただいた。

コンサートにあまり触れたことのないスタッフ自身がまずは関心を持ち、コンサート企画力を磨くこと、こんな小さなホールでも「ここまでやれる」という実績をつくること、何よりプロの音楽に触れることのない地域の人たちに足を運んでもらい、何か持ち帰っていただけるようなコンサートにすることを目的とした。

② 企画のポイント

震災から10年という長い年月が経ったが、心の復興というものはまだまだ続くと感じていた。子どもたちが元気で頑張っている姿が大人たちにとっては何よりのエネルギー。地域の人たちの希望である子どもたちとアーティストとのコラボレーションをプログラムに入れたかった。また施設には図書館が併設されているがもっと多様な使い方ができないか、アクティビティを機に図書館に縁がなかった人たちにも気軽に立ち寄ってもらえるようにしたい、ということのポイントとした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティに関しては、「誰に」「何を」伝えたいかという想いがありつつもコロナ禍の影響により、それがスムーズに形にできない難しさがあった。また、本公演はどんなステージにしたいのかイメージがつかず、アーティストとの想いの擦り合わせが難しかった。もっと早い段階でこちらの想いをきちんとアーティストにお伝えすることができたら良かったと感じた。また物理的な問題として、当ホールは、一般的なコンサートホールの設備と比べて、劣る部分は何点かあるので苦労した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティに関しては、どういう団体に声を掛け、どこで行うか？コーディネーターから沢山ヒントをいただいた。アクティビティでは外に出向いて行けない代わりに当施設をフルに使う方法を一緒に考えていただいた。普段、施設を利用して民謡の練習を行っている団体さんにお声掛けしてコラボ演奏が実現した。本公演の内容については、アーティストと想いを共有した後、具体的なイメージが持てるようになった。設備的な部分（舞台袖、照明、音響等）でもコーディネーターから様々なアイデアをいただき、何とかクリアすることが出来た。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティと本公演に参加した読み聞かせグループの指導者や保護者からは、子どもたちの個を引き出していただき、子供たち自身が自信を持って一生懸命取り組む姿を感じて大変感動した、というお声をいただいた。はじめてアーティストに出会ったときの顔と本番前の子どもたちの顔は全く違って、自信に満ち溢れているのを感じた。これが一番の成果だと感じている。また、図書館でのアクティビティでは普段足を運んだことのない人たちも参加され、「図書館がこんな素敵な場所だとは思わなかった、また来たい」というコメントをいただいた。図書館の職員も、初めてこのような使い方を体験し、年に1回はやってみたいと話していた。おんかつ事業を通して。最初は、「やらされている」という意識だったスタッフたちが自分事として考え、悩み、ひとつの目標に向かって協力してやっていこうとい

う意識に変わっていったことが、ひとつ大きな目標達成だと感じている。本公演ではすべてのスタッフ、アーティストの熱がお客様に伝わったと感じた。観客とステージが一体化したような雰囲気を作れたことは本当に良かった。アーティストはじめ関係者の方々に本当に恵まれた。全力でサポートしていただき、ありがとうございました。心からの感謝を申し上げます。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

有料にすることの難しさを感じた。震災後、支援慣れした人が多く「タダ」であれば集客には苦労しなかったであろうが、少しずつでもその意識を変え、人々の文化レベルの向上のためにとあえてチケット料金を高めの設定にした。2000円という価格は決して高くないと感じたが、なかなか興味を持ってもらえず集客に苦労した。もっと気軽に来れる価格設定にすべきだったか？事前予約は割引などの工夫があっても良いのかな、と感じた。また、12月は学生の吹奏楽のコンクールの時期だということで、学校関係がまったく無反応だったのが残念であった。日程を決める際にはそういうリサーチも重要。また、広報含む周知の仕方を学ばなければと感じた。近隣の市町村のホールとの繋がりをもっと作っていかなければ、ということも同時に感じた。

また準備段階で、相談窓口がコーディネーターであったり、アーティスト事務所のマネージャーだったりと思疎通がうまくできない場面が多々あった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

この町にはまだまだ音楽をはじめとする様々なものに触れる機会が必要だと感じた。特に今回アクティビティを通じて子どもたちの可能性を感じることができた。感性を磨くためのきっかけとそれぞれが持つ個を発揮できる場の提供をしていきたいと感じた。この町は排他的な印象があるが「音楽って算数と違ってとらえ方はひとそれぞれ違っていいんだよ。」という新野さんの言葉の通り、多様な考え方ができる人を育てていくのもこの施設の役割ではないだろうか。ホールに関しては、本当に乏しい設備をフルに使っているいろいろ試行錯誤、アドバイスしていただいた。ここのホールの可能性というものを知ることができた。今後のコンサート運営に活かしていきたい。

おしゃっち、これは大槌町文化交流センターの愛称です。

大槌町の人々にとっては愛称の意にとどまらない居場所です。

大槌町おんかつの当初の企画は仮設住宅で過ごした仲間との再会の場を作ったり、小さなコミュニティで生活が完結している小中学生に他者とのコミュニケーションの場を提供したりと、おしゃっちを出て行くことでした。しかし実施時期にコロナの影響がどの程度のものなのか全く予想できないことから再会の場に想定していた会場や学校の受け入れが不可能となりました。他のアクティビティ先を見つけるにしても情勢に左右されることは避けられないため、アクティビティ先からの中止の申し出等で生じるリスクを小さくするため、赴くことをあきらめて迎える方向に切り替え、全てのアクティビティをおしゃっち施設内で行うこととしました。おしゃっちがみんなの居場所であったからこそ切れた舵でした。

学校の受け入れが不可能になると、アクティビティ先の選定は非常にハードルが上がります。ただ幸いなことにアクティビティは金曜日、土曜日で設定されていたため、土曜日に学校がお休みの子どもたちと何かできるのではないかと、という安心材料がありました。

当初の企画書に立ち戻ると《地域の人たちを巻き込む》《郷土芸能》《読み聞かせボランティアとのコラボレーション》《宮沢賢治》《併設の図書館利用者のホールへの興味》等々、担当者生利さんの中で存在しているものがパラフレズ的にちりばめられていました。そこで大槌町図書ボランティア「このゆびとまれ」の子どもたちをご指導されている方とお話の場を設けていただき可能性を探ることにしました。ただ、読み聞かせコラボをアクティビティ内で実施する場合、それを鑑賞する人間は関係者に限られてしまい内輪での自己満足にしかならないため、一般の方に参加してもらうための仕掛けが必要でした。そこで図書館の司書の方にもお話を伺ったところ、日頃からクラフトワークショップをされていることから楽器作りのワークショップも可能であること、図書館をコンサート会場として使用可能とのことから、親子を対象に公募で実施するアクティビティを2回行うこととしました。あと1コマについては金曜日におしゃっちで大槌町の民謡を稽古をされている「一心会」さんが受けてくださいました。「一心会」さんには民謡の演奏をお願いしたことを新野さんに伝えると「聴くだけでは僕が行く意味がない」との新野さんの発案でコラボも実施することになりました。

「このゆびとまれ」の子どもたちにとって打楽器のインパクトは強烈な様子でした。知らない大人たちが同空間にいることへの違和感もあったのか怯えた様子の子もいましたが、始終行儀よく新野さんと共演の齋藤さんの演奏を聞いていてくれました。

「一心会」でのミニコンサートでは、ご指導の先生をはじめみなさまに盛り上げていただいた感があります。アーティストがそのエネルギーを得てトークも演奏もどんどんテンションが上がっていったのを感じましたし、コラボでは互いに心から楽しかったと思えるクオリティの高いものができあがりしました。

図書館でのアクティビティでは子どもたちによる「どんぐりと山猫（宮沢賢治作）」の朗読と新野さんの演奏（自作）でほっこりし、新野さんオリジナル楽曲「うんぼーこ」では手作り楽器と一緒に演奏したり、お話の内容をじっくり味わったりと充実した内容となりました。

コンサートにも「このゆびとまれ」の子どもたちに出演いただき、その結果3日間一緒にいるという濃密な時間をすごしました。アーティストにすっかりなついていた様子も忘れられません。

今回のおんかつはアクティビティで出会った方はもちろん食事どころのおかみさん、散歩して出会ったおじさまなどなど今でも一人一人の顔が浮かぶ実に濃ゆいものでした。これはおしゃっちのみなさんの町の人への向き合い方にあると思います。おしゃっちのみなさまありがとうございました。教えていただいたことだらけです。

実施団体：横手市

実施時期：令和3年12月2日（木）～令和3年12月4日（土）

出演アーティスト：石上真由子（ヴァイオリン）／新居由佳梨（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～ Dreams come true ～

期 日：令和3年12月2日（木） 11：00～11：45

会 場：横手北小学校 かまくら館ホール

参加者：6年1組 31人

アクティビティ1回目は、ホールで音楽を鑑賞したことがある児童が少なく、多少緊張している児童も見えましたが、演奏が始まりアクティビティが進むにつれ質問や発言が多くなっていきました。最後の質問コーナーでは、「演奏しているとき意識していることはなに?」、「鼻から息を吸っていましたが何をしているの?」などと、演奏だけではなくアーティストの動きまで感じ取っているようでした。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～ Dreams come true ～

期 日：令和3年12月2日（木） 13：25～14：10

会 場：横手北小学校 かまくら館ホール

参加者：6年2組 32人

アクティビティ2回目も引き続き横手北小学校の6年生。ヴァイオリンの紹介で弓の毛を緩め、毛の本数を見てもらったところ、非常にびっくりした顔と歓声が印象的でした。質問コーナーでは、演奏しているときに体を動かしているがどうしてなのか、弦と弓の交わる角度で音は変わるのかと質問したところ、アーティストから非常に良い質問ですねと褒められ、照れながらも喜んでいる様子でした。質問に対しアーティストから丁寧に解説していただき子供たちも納得しているようでした。

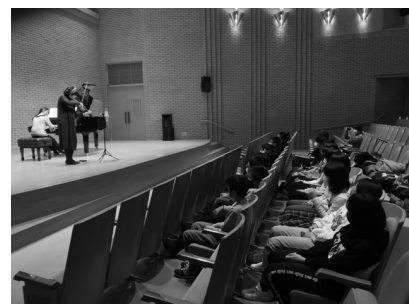
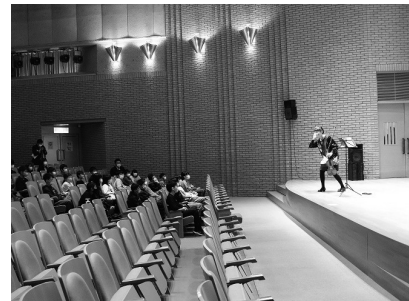
タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～ Dreams come true ～

期 日：令和3年12月3日（金） 10：30～11：15

会 場：旭小学校 かまくら館ホール

参加者：6年1組 23人

3回目からは旭小学校の児童にアクティビティを行いました。全体的におとなしい感じがあり、質問コーナーでもなかなか手を挙げてもらえませんでした。感想では「たった4つの弦だけで色々な楽曲をきれいに弾けることにすごいなと思い、興味を持った」と楽器の特徴や音色を感じてもらえたと思えました。最後にコンサートの無料券をアーティストが児童に渡し先生が来てみたい人いるかなと問いかけると多くの児童が手を挙げ、興味を持ってもらえたと感じました。



タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～ Dreams come true ～

期 日：令和3年12月3日（金） 13：45～14：30

会 場：旭小学校 かまくら館ホール

参加者：6年2組 24人

学校のブラスバンド部に所属している児童から、「ヴァイオリンとピアノの音色が響いてとても良かった。息が合っていてとても素晴らしかった」との感想があり、アーティストから今回初めて一緒に演奏したと言われるとびっくりしているようだった。また先生からは「足元の機械は何ですか？」との質問で、アーティストが足元の機械でiPadの譜めくりをしたところ、びっくりした声上がり、興味深々な目で見ていたことが印象的でした。



コンサート

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～ Dreams come true ～

期 日：令和3年12月4日（土） 13：30～15：15

会 場：かまくら館 ホール

参加者：87人

第一部は、アクティビティでも演奏した曲を取り入れ、クラシック音楽をヴァイオリンとピアノの表現力で魅力的に感じさせる演奏で、多彩な音色が響きわたりました。第二部では、クラシック音楽の愛好家も聴きごたえのある、ブラームスのヴァイオリンソナタ第3番を演奏し、アンコールではクライスラーの美しきロスマリンを演奏し終演となりました。

石上さんとピアニストの新居さんは初めての共演でしたが、大変息の合った素晴らしい演奏でクラシック音楽の魅力を伝え、お客様を魅了しました。

お客様によるアンケートでは「素晴らしい演奏でとても感動した。」「ここまでヴァイオリンで表現できるのか！楽器としての奥深さと演奏者の力量を感じた。」などと高評価が多く、大変満足していただけた演奏会となったと感じています。



① 応募の動機・事業のねらい

横手市民はクラシック音楽に触れる機会が少ないことから、良質なクラシックコンサートを幅広い世代に提供することで親しみや興味を持っていただくとともに、アクティビティを小中学校で実施することにより、若い世代が芸術文化に興味を持っていただき、生涯に渡って活動していくきっかけづくりの場として応募しました。

あわせて、ホールを身近な公共の場と感じていただける機会として開催し、文化芸術に携わる職員の企画・制作・運営能力向上を目的としました。

② 企画のポイント

児童に普段聴くことがないヴァイオリンの音色を感じてもらうことと、クラシック音楽の魅力を感じてもらうことが一番大きな目標でした。

市民には良質なクラシック音楽のコンサートを提供し、普及と観客の掘り起こしを目指しました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

当初、市内でも地区が離れた中学校と小学校でのアクティビティを実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学校でのアクティビティが行えず、近隣の広い別会場の確保に苦勞しました。

また、開催2カ月前になり予定していた中学校で学校行事が入り実施することができなくなったことから、別の学校に急遽依頼することとなった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

当初予定していた横手北小学校は、かまくら館に近い学校であったため、かまくら館ホールでアクティビティの開催を調整していたことから、中学校が実施できなくなった際、かまくら館から近い小学校へ依頼に出向き、主旨や内容を伝え実施していただけることとなった。

アクティビティからコンサートまですべて同じ場所で開催することができたことから、移動がなくスムーズな運営ができた。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、クラシック音楽やヴァイオリン、アーティストについて、子供たちが感じたことを質問していたことから、色々な目線で感じてもらった事が一番の成果だったと感じています。

また、コンサートは市民に本格的なクラシック音楽を届けるという目的では、アンケートの回答で大変良かったとの声が多かった。また、初めてクラシック音楽のコンサートに来た方もいたことから多少ではあるが観客の掘り起こしができたと感じている。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

市民に馴染みの少ないクラシック音楽のコンサートを開催することで、チケットの売れ行きが非常に不安であった。やはり売れ行きが悪く、コーディネーターに相談したところ、アクティビティの際に子供無料券を配ってみてはどうかとのアドバイスがあった。アクティビティ終了後、アーティストから直接プレゼントとして渡してもらい、家族でコンサートへ来場していただけるよう促しました。

また、地元新聞社にアクティビティの取材を依頼し、コンサート前日に記事にいただいたことで、

おんかつの周知とコンサートのPRを行うことが出来ました。

結果、令和元年度に実施したアウトリーチフォーラム時より当日券の販売が伸びたことから、広報の重要性を再認識しました。

おんかつ事業を通して、クラシック音楽だけではなく、馴染みの少ない文化芸術を市民に周知し、どう取り込んでいくかを再度考えさせられた事業だと思っています。今後クラシック音楽のみならず、色々な文化芸術を発信していける環境づくりをしていかなければならないと感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

文化芸術は楽しさや感動を与え、心を豊かにするとともに、人生をも豊かにするものだと考えています。しかし市民アンケートでは、それほど重要視されず、どうすれば重要性や必要性を感じてもらえるかが課題でした。このことをコーディネーターに相談したところ、「文化芸術を振興するうえで、どのような事業を行ったかを市民向けに、目に見える形で発信することが大事で、これを市民への領収書と呼んでいる」とのアドバイスがありました。

私自身色々な事業を行ってきましたが、ほとんどが集客のためのPRで、市民向けにどのような事業を行ったかとの発信はしていませんでしたので、非常に反省し考えさせられる言葉でした。

このアドバイスからアクティビティの様子をスライドショーにし、受付前で流してみました。お客様からのお声かけはありませんでしたが、足を止めスライドショーを見てくださる方も多数いましたので、今後も形にとらわれず継続して発信していきたいと思います。

現在横手市では、ホールの新築計画を進めている段階で、今後の文化芸術振興がより一層求められるます。そのためアウトリーチ活動や自主事業だけではなく、住民参加型のワークショップ、社会包摂などの総合的な文化芸術の振興を今後取り組んで行く必要があると感じています。そのためにも更なる職員の情報収集・企画・制作・運営能力の向上を目指しながら事業展開をしていかなければならないと感じました。

〈はじめに〉

秋田県東南部に位置する横手市は、毎年、大雪のニュースが流れ、豪雪地域で知られる。首都圏からの距離は、東京から新幹線「こまち」で大曲まで乗車、乗り換えて在来線で20分ほどと聞けば、意外と近く感じられるだろうか。秋田空港やいわて花巻空港もアクセス圏内である。2005年に旧横手市を含め8つの市町村が合併し、人口は現在約8万5000人ほどだが、減少が続いている。

今回の舞台となった横手市ふれあいセンターかまくら館（以下、「かまくら館」という）は、広大な横手市内の中心部にあり、実は一般社団法人横手市観光協会が管理する観光案内施設。施設内には、横手の伝統行事「かまくら」が年中体験できる「かまくら室」が併設されているほか、勇壮な「ぼんでん」も飾られ、横手の観光資源が紹介されている。その2階に備えられた室内楽向きのホール（346席）が、今回の会場である。

〈横手市おんかつの位置付けと本番までのプロセス〉

おんかつを担当されたのは、横手市教育委員会教育総務部生涯学習課の西田勝則さんと小松亨子さん。横手市は、かまくら館とは別に横手市民会館を設置しており、お二人は普段は横手市民会館を担当している。この市民会館の老朽化に伴い、現在建て替えが検討されており、今回のおんかつを通して将来の新しい市民会館の参考にしようという意気込みは並々ならぬものがあった。加えて、横手市では令和元年にアウトリーチ・フォーラム事業を実施している。西田さんと小松さんは当時もご担当されており、今回その経験が活かされていると感じられる場面が幾度もあった。

お二人は当初からヴァイオリンの石上真由子さんを一貫して希望されていた。4月の全体研修会におけるプレゼンテーション（オンラインで視聴）では、石上さんのエネルギー溢れる演奏が印象的で、ヴァイオリンを見たことも聴いたこともない子どもたちにぜひ聴いてもらいたいとの思いから、出演が決定した。

とはいえ、実施に向けておんかつを具体化していく中では、紆余曲折を経ることになった。ひとつは、アウトリーチ先の決定。小学校と中学校でのアウトリーチを計画していたが、中学校のPTAの行事と重なり、別の小学校での実施に変更となった。実施場所も、感染対策を考慮した会場候補を検討したものの、かまくら館のホールに子どもたちに来てもらって実施することになり、せめてステージ上で間近に見てもらえると良かったが、最終的には客席に子どもたち、ステージにアーティストという距離を保つての実施となった。ただし、コロナ禍で芸術鑑賞会など学外に出かける行事が中止となっていた中で、今回は逆に「お出かけ」できることが、小学校にとってはチャンスだったようだ。

また、12月の本番に備え、9月中の下見（個別研修）を予定していたが、新型コロナの第5波と重なったため延期。そのため、まずは8月末にオンラインで西田さん、小松さんとコーディネーターの打ち合わせをおこない、さらに9月には下見に先んじてオンラインで石上さんとの打ち合わせをおこなった。2020年度以降、おんかつでは下見→アーティスト打ち合わせ→本番というプロセスがコロナ禍で予定どおりに進められないというケースが生じているが、オンラインも駆使しながら柔軟に、しかし丁寧にご担当者とのコミュニケーションを取ることが大切なポイントだ。石上さんご本人も、オンラインとはいえ「担当者の方と直接話せて嬉しい」と話していた。

〈企画のポイントと本番〉

クラシック音楽にあまり馴染みがない人が多い地域なので、気軽に来てもらいたいという思いから、初めは「カジュアルに」という言葉でコンサートのイメージを説明していた西田さんだったが、石上さんとの打ち合わせを経て変化が起きた。ここが今回のターニングポイントだったと思う。プログラムの

方向性として、石上さんのアーティストとしてのスタイルを活かし、聞き覚えのある小品で構成するだけでなく、本格的な作品も盛り込んでほしいというリクエストになった。さらに、石上さんのヴァイオリニストとしては異色の経歴から、子どもたちに夢や希望を持つことの大切さを伝えてほしいという想いがあり、アクティビティやコンサートのテーマは「Dreams come true」とした。

その結果、石上さんは西田さんの想いにしっかりと応え、ご自身の個性を活かしつつ、クラシックの本格的な作品も取り入れたプログラムを用意された。アクティビティでは、音楽から広がるいろいろなイメージを子どもたちから引き出しつつ、ヴァイオリンとの出会いにも触れて「私はヴァイオリンをカッコいいと思っているんです」と話し、ヴァイオリニストとしての揺るぎない信念、ヴァイオリンが大好きという気持ちを伝えていた。共演したおんかつ支援登録アーティストの新居由佳梨さんとともに、コンサートではブラームスのヴァイオリンソナタを丁々発止の熱い演奏で締めくくった。

〈横手市おんかつはワンチーム〉

今回、ご担当者のお二人のみならず、ホールの環境を整えてくれたホール付スタッフや、受付から客席案内、写真撮影など様々な業務を生涯学習課の職員総出で支えてくださったことが何よりもおんかつを盛り上げていたと思う。職員のみなさんはアーティストに興味津々、練習の合間もコーヒーを飲みながら石上さんとたわいない話で温かい雰囲気づくりに努めておられたのが印象深かった。

さらに、おんかつの大先輩として、またピアノ「伴走」者として、新居さんの存在はとても心強く、石上さんと新居さんは初顔合わせとのことだったが、石上さんにとって大好きなお姉さんの存在に。チャーミングな人柄で皆を惹きつける石上さんを中心に、共演者、担当者、コーディネーターやスタッフたちが互いに信頼しあって仕事できたことは、各々にとって大きな収穫だったのではないだろうか。

横手市では厳しい冬を共助の仕組みで乗り越えてきたという。今回のおんかつをワンチームで終えられたのも、必要な時にそれぞれの持ち場で助け合う、そんな地域性がベースにあったのだろうと大いに感じた。

実施団体：一般財団法人大館市文教振興事業団

実施時期：令和3年10月28日（木）～令和3年10月30日（土）

出演アーティスト：高橋ドレミ&實川風ピアノデュオ

アクティビティ

タイトル：ゆるっとピアノでつながるクラシック

期 日：令和3年10月28日（木） 14：15～15：00

会 場：大館市立川口小学校 音楽室

参加者：3年生 12人、4年生 12人（計24人）

今回の「おんかつ」において最初のアクティビティで、川口小学校の3、4年生を対象に実施しました。拍手やじゃんけんを使った二人の息の合わせ方や、連弾時の手元の動きを見る（コロナ対策のためピアノの周りに集まらず、カメラ撮影しモニターで上映）といった動きのある体験や、目を瞑り演奏を聴いて情景を想像するといった静かな体験などが盛り込まれ、児童も楽しめる内容となりました。少し大人しめなクラスでしたが、演奏やアーティストの話の時にはリズムをとったり、頷いたり真剣な様子が印象的でした。

タイトル：ゆるっとピアノでつながるクラシック

期 日：令和3年10月29日（金） 9：15～10：00

会 場：大館市立城南小学校 音楽室

参加者：4年1組 24人

城南小学校4年1組を対象に実施しました。内容は一回目と同内容のプログラムではありましたが、活発な子が多くまた違った印象のアクティビティとなりました。曲のイメージを聞く場面でも、アーティストから大まかな説明はあったものの、様々な答えがあり、より自由に音楽を楽しめた内容だった。

タイトル：ゆるっとピアノでつながるクラシック

期 日：令和3年10月29日（金） 10：45～11：30

会 場：大館市立城南小学校 音楽室

参加者：4年2組 24人

2回目に引き続き城南小学校の4年2組を対象に同内容で実施しました。アーティストとの受け答えの場面では前回同様に活発な児童が多かったのですが、次への切り替えのタイミングや児童へのアプローチの仕方などを変えて実施していただきました。時間は少し押ししてしまいましたが、終了後は対象クラスの児童が廊下や階段まで見送りしてくれるなど、アーティストをより身近に感じていただき充実した内容だった。



タイトル：ゆるっとピアノでつながるクラシック

期 日：令和3年10月29日（金） 13：55～14：40

会 場：大館市立城南小学校 音楽室

参加者：4年生 32人

桂城小学校4年生を対象に同内容で実施しました。今回のアクティビティの中では最多人数のクラスでしたが、先の三回のアクティビティを踏まえスマートな流れで実施することができた。児童の反応も良く、同じ回答でも自分の言葉で発言したい子など積極的な印象であった。途中、集中力が切れる場面もあったが飽きてきたというわけではなく、その後も真剣に演奏を聞いてくれている様子であった。



コンサート

タイトル：たかはしどれみとじつかわかおるのゆるっとピアノでつながるクラシックコンサート

期 日：令和3年10月30日（土） 14：00～15：30

会 場：ほくしか鹿鳴ホール（大館市民文化会館）中ホール

参加者：111人（半券数）

2部構成で休憩を挟んだ90分のプログラムで実施しました。1部はベートーヴェン「行進曲ニ長調Op.45-1」から連弾で始まり、2部ではアーティストそれぞれのソロを組み込んだしっかりと親子で、大人も楽しめる内容でした。当日配布のパンフレットにアクティビティ時の各校の写真を印刷し、よりアーティストに親近感を持っていただけるよう取り組みました。最終的には終了予定時間を押ししてしまいましたが、曲の説明などトークが楽しく、わかりやすく、地域ネタも入れてくださりすごく充実した大満足なコンサートになりました。



① 応募の動機・事業のねらい

子どもたちにクラシック音楽と生の演奏を体験する機会を提供することで、鑑賞機会の少ない地方都市におけるクラシック音楽文化を広げることと、子どもたちにクラシック音楽が普及することでホールの次世代顧客の創出につなげていきたい。

② 企画のポイント

一昨年のアウトリーチフォーラムで、市内小学校へのアウトリーチを皮切りに、アクティビティ先を小学校に絞りました。ちょっと敷居が高いなど感じやすいクラシック音楽でも、テレビCMなど何気なく流れてる曲を中心に演奏していただき、よりクラシック音楽やアーティストを身近に感じてもらいたい。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

- ・アクティビティやコンサート実施にあたりアーティストにどこまでお任せしていいのか、主催者としてどのくらいまで要望していいのか判断が難しかった。また、自分自身進めていく手順をうまく把握できていなかったことで全体的に後手にまわった動きになってしまった。
- ・アクティビティ実施からコンサートへの集客につなげられるか、そもそもクラシック公演での集客が弱いということもあったので不安はあった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・コーディネーター、アシスタント、地域創造さんから、過去の事例を含めて具体的なアドバイスをいただき、常に勉強させていただきながら進めることができた。アーティストのお二人もアクティビティ後の振り返りで「こうしてみました」「次はこんな感じで」と柔軟に対応してくださり、満足のいく内容に仕上げただけでした。
- ・学校向けのイベント時には教育委員会を通して、学校へのポスター掲示、チラシ配布依頼が主でしたが、今回のおんかつでは一歩踏み込んで、アーティストにご協力いただきアクティビティ実施校へは告知動画と、市内全小学校にはお昼の放送などで聴いてもらえるように主な演奏曲のサンプルCDの配布を行いました。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティ先の児童や、担当の先生もご家族でコンサートに来ていただけた。小学生に限らず未就学児を連れのおかあさんや、大人同士など「親子で楽しむ」というコンサートのコンセプトはあったものの幅広い客層にご来場いただけた。終了後には「また同じアーティストさん呼んでください」、「リラックスして聴けました」という声が多かった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

主催者の狙いと実際の来場者の違いだったり、作り上げる難しさを改めて感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

大館市の人々はクラシックコンサートへの関心が薄く集客はいつも苦戦します。しかし今回のコンサートのアンケートでは、「気軽に聞けた」、「難しいと思っていたけど楽しかった」などの回答もあった。クラシックに興味がないあるいは関心がないという方でも生の演奏に触れ、アーティストを身近に感じ

でもらうことで良いものだと思っただけることがわかりました。今後もそういった小さなきっかけを感じてくれた人が継続して足を運んでくださるよう自分自身も楽しみながら事業企画、運営をしていきたい。

《はじめに》

大館市は秋田県の中でも北部に位置し、「忠犬ハチ公」の秋田犬、比内鶏などが有名な、自然や特産物が豊かな土地である。今回のおんかつの舞台となる「ほくしか鹿鳴ホール（大館市民文化会館）」は大館市のちょうど中心にあり、日本酒製造会社「北鹿」のネーミングライツにより、2019年から「ほくしか鹿鳴ホール」の愛称で親しまれるようになった。1198席の大ホール、414席の中ホール、会議室やリハーサル室、展示室を有しており、自主事業やアウトリーチなどを積極的に実施している。また、市民サークル活動やワークショップなども盛んに行われており、市民に親しまれているホールである。

今回のおんかつを担当される長岡さんは、これまで貸館や施設管理の業務を担当されており、公演制作を担当するのは初めてとのこと。おんかつを通して事業について学び、地域子どもたちへの文化振興につなげたいと、熱心に取り組んでくださった。同じく担当の山内さんは豊富な経験をお持ちの方で、チラシ・プログラム作成をはじめ、多くのサポートしていただいた。

企画は「子どもたちにクラシック音楽の生演奏を体感してもらう」「ホールの次世代の顧客を創出する」の2点を軸とし、子どもたちとその家族を対象とすることとした。子どもにとって親しみのある楽器「ピアノ」に焦点を当て、アーティストは高橋ドレミさんと實川風さんのピアノデュオが選ばれた。

《アクティビティ》

アクティビティは、小学4年生を対象とし、大館市教育委員会を通して実施先を募ったところ、3校に決定した。

プログラムの前半は、連弾の魅力やそれぞれの役割分担について、高音・低音パートに分かれて演奏したり、ビデオカメラで手元を映したり、また、演奏中の呼吸の合わせ方について、子どもたちと一緒に手拍子で体験してもらったりした。後半は、目を閉じて演奏を聴いてもらい、イメージしたことについて子どもたちと意見を交わし、最後に10分程の少し長めの楽曲「デュエット（メンデルスゾーン作曲）」を演奏して終了となった。

子どもたちの反応は素直であった。クラスによっては恥ずかしがり屋な面もあったが、アーティストが投げかける言葉を素直に聞き、演奏も集中して聴き入っていた。ある学校のアクティビティ終了後、控室まで案内してくれた生徒に感想を聞いたところ、最後の曲が心に残ったと答えてくれた。演奏前のMCにて、「私たちはこの曲（デュエット）がとても好き。少し長いけど、みんなにも聴いてもらいたい。」とアーティスト二人の曲に対する率直な「好き」という思いを伝えたことが、子どもたちの心にダイレクトに響いたのだと感じた。

《コンサート》

コンサートは、堅苦しさを感じずリラックスして楽しんでもらいたいとの思いを込めて「ゆるっとピアノでつながるクラシックコンサート」と題した。未就学児も入場可能とし、家族・グループ単位の配席とした。

ベートーヴェンの軽快な曲で始まり、「ハンガリー舞曲」「スラヴ舞曲」と舞曲ならではの独特なリズムやメロディーを楽しんでいただき、また、クラシック曲のジャズ風にアレンジした楽曲、休憩後のそれぞれのソロ曲、最後はアクティビティでも演奏した「デュエット」と、2時間弱のコンサートとなった。演奏はもちろんのこと、アーティスト二人のテンポの良いトークもあり、客席からは楽しそうな笑い声や拍手をいただいた。コンサートは大成功であった。

さて、このコンサートでは、鑑賞マナーの手引となる『クラシック音楽鑑賞あれこれQ&A』を作成

し、プログラムとともにお客様に配布した。「居心地の悪さを感じないコンサートを作りたい」と長岡さんのアイデアから作成に至った。特に懸念されていたのが拍手のタイミングである。『Q&A』では「気持ちの昂りから思わず拍手しても間違いではない」と記載したところ、本番ではお客様からあたたかい拍手を何度もいただいた。音楽を聴いた喜びや楽しさなどの、お客様の素直な感情を感じられた。

《さいごに》

今回初めて事業を担当された長岡さんは、アーティストにリクエストできることは何か、NGな点は何かなどのボーダーラインを見極めるのが難しかったとおっしゃっていた。実際は、高橋さん・實川さんの親しみやすいお人柄もあり、長岡さんも安心してコミュニケーションをとっていたようである。たしかに事業を行う上で、担当者とアーティストとのやり取りや信頼関係は大切なことだが、長岡さん・山内さんはあたたかく誠実に対応してくださる方々であるため、アーティストのお二人はリラックスして音楽に集中できたであろう。

また、今回のおんかつでは、長岡さん・山内さんはじめ、ほくしか鹿鳴ホールは様々な人を巻き込める懐の広さを強く感じた。今後も小学校をはじめ、市内の様々なコミュニティと繋がったり、多くのアーティストと事業を展開したりと、ほくしか鹿鳴ホールの未来を築いていただきたい。

実施団体：会津美里町

実施時期：令和3年12月2日（木）～令和3年12月4日（土）

出演アーティスト：齊藤一也（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなぐ新たな出会い～

期 日：令和3年12月2日（木） 11：00～11：45

会 場：複合文化施設じげんホール

参加者：高田中学校2年1組生徒 28人、先生 2人

「心に描くクラシック」をテーマに、生徒たちに、演奏を聴き自由にイメージしてもらったり、齊藤さんから、オルゴールを使用しながら、ピアノの構造について説明していただきました。『ショパンの「小犬のワルツ」による即興曲-ネコ好きのための-』では、スクリーンに弾いている手元を投影し、生徒たちは、超絶技巧の演奏に圧倒された様子でした。最後に、齊藤さんがピアニストを目指し、必死で練習された曲目『スケルツォ第2番変ロ短調 op.31』を演奏し、夢や希望をもつ生徒たちへエールを送りました。プログラムの中で、校歌をピアノ独奏用にアレンジして披露した際、指揮を振ったり、太ももの上でピアノを弾くように指を動かしていた生徒もあり、思い思いに感じている様子が印象的でした。

タイトル：齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなぐ新たな出会い～

期 日：令和3年12月2日（木） 14：15～15：00

会 場：複合文化施設じげんホール

参加者：本郷中学校2年生徒 29人、先生 3人

「心に描くクラシック」をテーマに、生徒たちに、演奏を聴き自由にイメージしてもらったり、齊藤さんから、オルゴールを使用しながら、ピアノの構造について説明していただきました。『ショパンの「小犬のワルツ」による即興曲-ネコ好きのための-』では、スクリーンに弾いている手元を投影し、生徒たちは、超絶技巧の演奏に圧倒された様子でした。最後に、齊藤さんがピアニストを目指し、必死で練習された曲目『スケルツォ第2番変ロ短調 op.31』を演奏し、夢や希望をもつ生徒たちへエールを送りました。プログラムの中で、校歌をピアノ独奏用にアレンジして披露した際は、生徒だけでなく先生も集中し、真剣に聞き入っている様子が印象的でした。



タイトル：齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなぐ新たな出会い～

期 日：令和3年12月3日（金） 11：00～11：45

会 場：複合文化施設じげんホール

参 加 者：高田中学校2年2組生徒 32人、先生 2人

「心に描くクラシック」をテーマに、生徒たちに、演奏を聴き自由にイメージしてもらったり、齊藤さんから、オルゴールを使用しながら、ピアノの構造について説明していただきました。生徒たちは、オルゴールの音量の違いに驚き、響板のすごさに驚きの表情を見せていたのが印象的でした。『ショパンの「小犬のワルツ」による即興曲-ネコ好きのための-』では、スクリーンに弾いている手元を投影し、生徒たちは、超絶技巧の演奏に圧倒された様子でした。最後に、齊藤さんがピアニストを目指し、必死で練習された曲目『スケルツォ第2番変ロ短調 op.31』を演奏し、夢や希望をもつ生徒たちへエールを送りました。



タイトル：齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなぐ新たな出会い～

期 日：令和3年12月3日（金） 14：15～15：00

会 場：複合文化施設じげんホール

参 加 者：新鶴中学校2年生生徒 28人、先生 3人

「心に描くクラシック」をテーマに、生徒たちに、演奏を聴き自由にイメージしてもらったり、齊藤さんから、オルゴールを使用しながら、ピアノの構造について説明していただきました。『水の戯れ』演奏後、生徒から「滝が流れ落ちる感じ」等、様々な水のイメージを聞くことができたことが印象に残りました。『ショパンの「小犬のワルツ」による即興曲-ネコ好きのための-』では、スクリーンに弾いている手元を投影し、生徒たちは、超絶技巧の演奏に圧倒された様子でした。最後に、齊藤さんがピアニストを目指し、必死で練習された曲目『スケルツォ第2番変ロ短調 op.31』を演奏し、夢や希望をもつ生徒たちへエールを送りました。



コンサート

タイトル：齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなく新たな出会い～

期 日：令和3年12月4日（土） 14：00～16：00

会 場：複合文化施設じげんホール 定員349人

参加者：入場者数：150人（新型コロナウイルス感染症対策の為、入場者数を制限しての開催）

コンサートは2部構成で、前半は「情景」・後半は「出会い」をテーマにしたプログラムを実施しました。齊藤さんからは、MCで作曲者や曲についての説明や、クラシック音楽の楽しみ方（自由にイメージすること）を伝えていただきました。後半冒頭では、会津美里町町歌『会津美里町町民の歌～美しきふる里～』を作詞作曲された青木真一氏をゲストにお招きし、町歌を即興でアレンジしたコラボレーションをお2人で披露されるなど、心温まるコンサートになりました。コンサートチケットは完売し、購入者全員が来場されました。



① 応募の動機・事業のねらい

これまでの本町の文化芸術事業は、文芸や造形物の振興が中心であったが、令和元年5月7日に、本町初の公共ホール及び図書館を兼ね備えた複合文化施設併設の新庁舎が開庁したことを好機と捉え、普段、生の演奏にふれる機会が少ない町民に本物の音楽を届け、町の文化芸術の更なる振興を図るほか、心豊かな町民生活の実現に寄与するため、本事業を実施しました。

② 企画のポイント

事業全体のテーマ：「クラシック音楽愛を育む」「郷土愛を育む」

- ・アクティビティ ①ピアノの魅力を演奏や解説を通し、伝えていただく。②心でクラシック音楽を聴く体験をしてもらう。③クラシック音楽を聴いて情景を感じる体験をしてもらう。④アーティストから、夢や目標をもつ子供たちへ自身の経験等を踏まえ、メッセージを伝えていただく。ことをポイントにしました。
- ・コンサート ①心に描く（「情景を感じる」をイメージ）②出会い（クラシック音楽との出会い、ピアノとの出会い、アーティストとの出会い、会津美里町との出会い、ホールとの出会い、本事業に関わる人との出会い等をイメージ）をポイントにしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・本町で有料のクラシックコンサートを開催するのが初の試みだった為、一連の業務（①公演内容の企画と制作（企画立案）②広報宣伝の計画と管理（広報宣伝）③リハーサルや本番の実施と進行管理（本番実施））を全て手探りで進めなければならなかったことです。
- ・クラシック音楽と会津美里町町歌とのコラボレーションをどう企画に入れていくか。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・不明点や疑問点等については、1人で抱え込まないようコーディネーター側と共有し、解消しながら事業実施につなげていきました。
- ・近隣地域のホールで開催されたクラシックコンサートに2度足を運び、コンサート実施にあたってのイメージ（照明・音響、影アナ、コンサート進行、感染症対策、ホール内の動線等）をつかみ、その後の準備に活かしました。また、他のホールで開催しているクラシックコンサートのチラシを広報宣伝の際、参考にしました。
- ・クラシック音楽と会津美里町町歌とのコラボレーションについては、過年度の公共ホール音楽活性化事業報告書を参照する他、コーディネーター等のアドバイスを受け、企画内容の見直しをはかり、内容を固めていきました。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、特別にグランドピアノの大屋根を取り外し、インリーチ形式で実施しました。

普段クラシック音楽を聴く機会が少ない生徒たちに、アーティストと近い距離で②企画のポイントを踏まえたアクティビティを体験してもらえたことは、貴重でかけがえのない時間になったと思います。また、コンサートでは、来場者アンケートを見ると、素敵な演奏だった、感動した、コロナ禍で心が洗われた等、高い評価をいただき、じげんホールの新たな可能性を見いだすことができました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ・本事業を実施するうえで、ホール担当者とアーティストとの役割分担がなかなか掴めなかったことです。また、コンサート当日の「場当たり・段取りリハ」では、リハーサルの進行管理がコーディネーター任せになってしまいました。
- ・ホールの利用形態が貸館中心であり、公民館事業の参加者を中心とした利用であることです。(利用者の固定化への懸念) 幅広い世代の町民に親しまれるホールにする為の仕組みづくりや、本格的なコンサート開催へ向けた、企画立案から実施までの更なるノウハウの習得、舞台及び音響技術者の育成・確保といった体制づくりが、今後も継続した課題です。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「美里の場合、無料慣れしている。仕事量がぐっと増えてしまうかもしれないが、手間ひまかけていることを見せていく必要がある。チラシやポスターの作り方から工夫していかないと。広報も多角的に攻めていかないと、コンサートに人は来てくれない。地域性をつめて、オリジナリティを出す、斬新さを出さないとかなり厳しい・・・」これは、4月の全体研修会の際に、コーディネーターからいただいた言葉でした。新たなものを生み出す苦しさは、事業担当者になった方にしか分からないかもしれません。途中で投げ出さないという覚悟のもと、たくさんの方々のサポートを受けながら、駆け抜けた7か月余りでした。おんかつ事業は、まさに、じげんホールの新たな可能性に一石を投じた事業だと思えます。今回、コンサートチケットが完売し、購入者全員がコンサートに足を運んでくれたこと、来場者の皆さんがこのコンサートを待ちに待っていてくれたこと、こうした温かい思いをアーティスト・スタッフが共に感じながら、コンサートを終えることができました。改めて、『音楽を通じ、人に地域に元気を与えていくこと』それが、じげんホールの果たす役割であることを認識しました。

《はじめに》

会津美里町は福島県の旧会津高田町・旧会津本郷町・旧新鶴村が平成17年に合併した町である。自然に囲まれた会津盆地の風景が美しく広がり、伊佐須美神社をはじめとする深い歴史や伝統工芸を持っている豊かな地域である。

今回のおんかつは「会津美里町役場本庁舎及び複合文化施設（じげんプラザ）」の中にある「じげんホール」にて行われた。じげんプラザは令和元年に完成された新しい町役場で、役所やホールのほか、図書館、公民館、自主学習スペースなど多様な機能を備えており、子どもから高齢者まで毎日多くの町民が利用している。

今回担当してくださったのは、会津美里町教育文化課 文化係の遠藤さん・井島さん・梶原さんの3名である。遠藤さんたちはこれまでは町内文化財の保存・運営が主な業務であったため、コンサートを実施する上でのノウハウがない状態でのスタートとなった。また、町が有料のクラシック音楽コンサートを主催することは初の試みであり、おんかつを通してじげんホールの可能性を広げていきたいとのことであった。

アーティストはピアニストの齊藤一也さん。4月のプレゼンテーションでの齊藤さんの演奏に惹き込まれ、今回お願いすることとなった。

《アクティビティ》

会津美里町では感染症対策として、アーティストが各学校へ赴くのではなく、生徒たちにじげんホールへ来てもらうインリーチ形式をとった。生徒たちにピアノの音を間近で感じてもらうため、ステージ中央にピアノを設置し、それを囲うように椅子を並べ、ピアノの大屋根を外して全方向からピアノがよく見えるようセッティングをした。

アクティビティ対象となったのは町内の中学2年生。中学2年生と言えばちょうど進路に悩み始める年齢である。「将来・夢について、子どもたちにメッセージを伝えたい」と遠藤さんたちよりテーマの提案があり、それをもとに齊藤さんにプログラムを考えていただいた。

アクティビティでは、自由にイメージを膨らませながら音楽を聴いてもらう体験をしてもらったり、ピアノが持つ楽器としての可能性について体験してもらったりした。また、各学校の校歌の即興アレンジと齊藤さんのオリジナル作品（ショパンの「小犬のワルツ」による即興曲 — ネコ好きのための —）の演奏では、齊藤さんのユーモア溢れた音楽に生徒たちは楽しそうであった。

深く印象に残ったのは、中学2年生に向けた齊藤さんからのメッセージである。演奏曲は、齊藤さんがピアニストになるために中学2年生の時に取り組んだショパンの「スケルツォ2番」。ちょうど齊藤さんも生徒たちと同じ中学2年生の時に進路のためにこの作品に取り組み、苦しい思いをたくさんしたとのこと。「くじけたり諦めそうになったりして落ち込んでも良い。その後にどう立ち上がるか。」や「夢や目標を持ったり挑戦したりすること」など、齊藤さんの言葉に、生徒たちの耳を傾けていた様子が印象的であった。

《コンサート》

コンサートのタイトルは「齊藤一也ピアノコンサート 心に描くクラシック～音色がつなぐ新たな出会い～」。お客様に届けたいテーマとして「音楽を心で感じる」「情景・郷土愛」が挙げられ、それらをもとに齊藤さんに演奏プログラムを考えていただいた。また、町歌である『会津美里まち町民の歌～美しきふるさと～』の作詞・作曲者である青木真一さんとの共演をプログラムに組み込んだ。青木さんの

町歌の弾き語りと齊藤さんのピアノアレンジ版をそれぞれ演奏し、トークを交え、2人の即興演奏を披露した。

終演後はお客様の熱気を感じた。前日までにチケットが完売したことはもちろん嬉しいことだが、それ以上に150名の来場者に対して125名の方がアンケートを回答したことに、いかにこのコンサートがお客様の心に残ったものであったかを感じることができる。アンケートでは「純粋な気持ちで音楽を聴くことができた」「自由にイメージを膨らませることができた」などのコメントが見られ、企画のテーマである「音楽を自由に心で感じ取って欲しい」のメッセージは、多くのお客様の胸に響いたようであった。音楽やお客様に対して丁寧に真摯に向き合う齊藤さんだからこそ、お客様は純粋な音楽の世界に浸れたのだと思う。

《さいごに》

会津美里町にとって初めての主催公演であったため、アーティストとの内容の擦り合わせや広報など、通常のコンサート制作を進める一方、影アナウンスの原稿や地震が発生した場合の対応フローなど、主催公演の基盤もつくっていかなくてはならなかった。遠藤さんをはじめ、教育文化課の皆さんにとっては大変な1年であったと思うが、会津美里町は素晴らしいチームであった。コンサート会場や受付の設営では教育文化課の皆さんが総出で準備をされ、音響・照明の担当の方は要望や突然のトラブルに柔軟に対応してくださった。今回のおんかつを無事に完走できたのは、関わってくださった皆さんのおかげである。

遠藤さんたちがもともと持っている豊富なアイデアに加え、それを実行・完遂するタフさ、チームワークの良さなど、会津美里町には素晴らしいポテンシャルがある。そして、今回、主催公演の土台が少してきたことによって、今後の企画展開の可能性が広がったと思う。ぜひ継続して、これからも様々な企画を町の方に届けて行ってほしい。いちファンとして、会津美里町のコンサートにまた伺いたい。

アクティビティ

タイトル：見つけよう！音楽の光！

期 日：令和3年10月27日（水） 10：50～11：40

会 場：町田市立金井中学校 体育館

参加者：2年生 65人

金井中学校は様々な職業に就いている方を招致し、職業の話を聞く機会を設ける等、キャリア教育に力を入れている。今回のアクティビティは、職場体験が中止となった2年生を対象に行った。人数が多い為、2クラスずつ合同で体育館で行った。また、感染対策用にアクリルパネルの衝立を用意していたが、竹多さんと生徒の距離が十分に確保できたため、学校側の許可を得て、アクリルパネル板は使用せずに実施した。アクティビティでは、「可能性を信じる、自分を信じる」をテーマに、竹多さんがソプラノ歌手を目指す過程でぶつかった心の葛藤やそれを乗り越えてソプラノ歌手の道を志したことをメッセージとして伝えたり、合唱コンクールの課題曲に触れた。

生徒たちは緊張していたのか、反応は遠慮がちだったが、真剣に聞き入っていた。竹多さんの問いかけにも頷くなどして応えていた。

タイトル：見つけよう！音楽の光！

期 日：令和3年10月27日（水） 13：25～14：15

会 場：町田市立金井中学校 体育館

参加者：2年生 66人

前の時間に引き続き、2クラスで実施。前の時間では、イスの配置を全体的に縦に並べたため、後ろの列の生徒が若干見えづらそうだったので、イスの配置を扇形に変えた。

また、前の時間は次の合唱練習の予定の関係で、楽譜を持って参加となったが、交流プログラムをより楽しめるように、この時間からは一旦楽譜を持たないで参加してもらうことに変更した。

前の2クラスより、反応が大きく、最後の質問コーナーでは竹多さんに好きな食べ物を質問したり、最後の挨拶の時に、竹多さんや石塚さんに愛称を付けて挨拶するなど、楽しい雰囲気での実施となった。



タイトル：見つけよう！音楽の光！

期 日：令和3年10月28日（木） 9：50～10：40

会 場：町田市立金井中学校 体育館

参加者：2年生 33人

金井中学校で行うアクティビティの最終日は、残り1クラスだったため、人数が半分程度になり、竹多さんの豊かな声量をより体で感じられた様子で、声の大きさに驚いている生徒が多数いた。また、人数が少なくなったことで、竹多さんと心理的にも距離が近づき、とてもアットホームな雰囲気で行うことができた。感染対策の為、前日に引き続き体育館で実施した。

声を出すときの体の使い方などを質問する生徒がいるなど、有意義なプログラムとなった。

この回ではアクリルパネル板を反響板代わりにピアノの後ろに立てるといった試みを行ったところ、ピアノの音の反響が格段に良くなり、石塚さんからも「響きが全然違いますね」と喜んでいただけました。竹多さんも歌いやすそうだった。

タイトル：見つけよう！音楽の光！

期 日：令和3年10月28日（木） 13：00～13：45

会 場：町田市立金井中学校 体育館

参加者：特別支援学級（みどりの学級）1年生～6年生 20人

体育館は改修工事中だった為、音楽室での実施となった。「生き物たちの音楽」をテーマに、様々な動物たちを題材にした歌や曲を楽しんだ。竹多さんの大きな歌声と石塚さん演奏の「小犬のワルツ」の高速演奏のテクニックに、子どもたちは驚き、大絶賛で大盛り上がりとなった。

質問コーナーでは次々に手を挙げ、感想を言う子がたくさんいた。竹多さんだけでなく、ピアニストの石塚さんに対しても感想が多く寄せられた。



コンサート

タイトル：小中学生へ贈るはじめてのクラシック～見つけよう！
音楽の光！～ 竹多倫子ソプラノリサイタル

期 日：令和3年10月29日（金） 17：30～18：30

会 場：和光大学ポプリホール鶴川

参加者：48人

前半は、金井小学校で行った「生き物たちの音楽」をテーマに、観客も手拍子でリズムをとるなど参加しながら楽しむプログラム、後半は金井中学校で伝えたソプラノ歌手になるまでの葛藤や、歌手人生の転機となった曲を歌った。

公演アンケートでは、「子ども向けかと思っていたが、大人も十分楽しめる内容でとても感動した」「歌とピアノ伴奏に号泣した」「子どもが金井小でアクティビティに参加し、歌が凄かったと話していたので観に来ました」など、たくさんの感想が寄せられた。



① 応募の動機・事業のねらい

応募動機は、職員の配置転換等により生じた経験値の不足と、将来的にホール独自のおんかつを実施したい希望があり、応募した。事業の狙いとしては、現在、ポプリホールの主な客層は高齢者が中心なので、町田市の子どもたちにクラシック音楽の魅力を発信し、将来のホール鑑賞者を育て、町田市の小中学生に、もっとクラシック音楽や、歌唱の魅力を知ってもらいたいという思いで企画した。

② 企画のポイント

小中学生に苦手意識を持たず、クラシック音楽や、歌唱を楽しんでもらう。

ホールのコンサートに興味・関心を持つきっかけを作る。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

【中学校】中学校の要望で、2年生の実施となったが、全5クラスあり、1回毎のアクティビティの人数が多すぎてしまうため、クラスを3編成に分けて実施することにしたが、その際に2日間に分けなければ実施できず、学校との予定のすり合わせが難しかった。

【小学校】6年生を希望していたが、体育館が改修工事で使用できず、音楽室での実施となったため、6年生は人数が多くて間隔を十分に確保できないので、音楽室での実施は不可能だった。そこでポプリホールに招いて実施する提案も行ったが、コロナ禍の中、学校外に出かけることはできず6年生を対象にするのは諦めざるを得なかった。そして同様の事情から、代わりに対象とする学年の選出に苦慮した。

【コンサート】平日開催だった為、子どもが来場しやすい時間の予測がつかず、公演タイムスケジュールに悩んだ。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

【中学校】2クラス・2クラス・1クラスの編成にし、残り1クラスは翌日の1時間目に時間を作っていたいただき、実施した。

【小学校】小学校側の提案で、特別支援学級20名を対象として音楽室で実施とした。

【コンサート】子どもがいる職員などに相談し、放課後であり遅くならない時間で、来場しやすいような時間でタイムスケジュールを組んだ。

⑤ 事業を実施しての成果

子どもたちの反応が大きく、楽しんで参加する様子を目の当たりにして、やりがいを感じた。ほとんどの子どもはオペラに触れることや、本物のオペラ歌手の歌声を聴くことが初めてだったようで、「歌声にびっくりしました」という感想が多く寄せられた。クラシック音楽や歌唱に興味関心を持つきっかけづくりという目標は果たせたと感じた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

子ども向け公演として実施したが、コロナ禍という状況もあり、あまり券売が伸びず、対象とした小中学生にはほとんど来てもらえなかった。コロナ禍に合わせた広報戦略を立て、しっかりと広報に取り組むべきだったと痛感した。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

ポプリホールは室内楽に適した構造であるという特徴を生かし、クラシック公演や落語など大人世代に向けた公演を多く行っており、子ども向け公演はあまり行ってこなかったが、今回の事業を通じ、新鮮さとともに可能性を感じた。

来場者アンケートにも「子どもと一緒に観られる公演が増えると嬉しい」との感想が寄せられ、ニーズはあると思うので今後は若い世代向け、子ども向け公演を増やして、ホールの客層に若い世代を取り込み、子どもから大人まであらゆる層が楽しむことのできる環境づくりや事業制作に取り組んでいきたいと改めて感じた。

町田市は、東京都の南端に位置した市である。新宿から小田急線の快速急行に乗車すれば中心地である町田駅には30分程度で着く利便性に優れている。市全体の面積は、71.55平方キロメートルと東京都の市の中でも大きい部類に入り、それに比例して人口は約43万人と多い。町田の中心地は、都市部と遜色がないほどに発展しており、前述の利便性もあり、市全体の人口はさらに増加の傾向にある。

今回、おんかつを実施した「和光大学ポプリホール鶴川」（以下、ポプリホール）は、町田の中心地から2駅先の緑に囲まれた鶴川駅の駅前に位置したホールで、2012年にオープンしたまだ新しいホールである。地下2階にあるホールは、近代的な内装で音響にも優れ、300席というキャパシティは室内楽に最適である。このホールの運営は、町田市民ホール（現在は改装中）等を運営している一般財団法人町田市文化・国際交流財団が指定管理業者として運営しているが、ポプリホールの運営面での大きな特徴としては、学校法人和光学園和光大学が長期的な支援を行う代わりにスポンサーの名称を施設の名前に入れる「ネーミングライツ」を取り入れている点が挙げられる。全国のあらゆるホールが運営に苦慮している中、安定したスポンサーによる支援がある点は、大きな利点である。

さて、このポプリホールでは、これまでも様々な趣向を持つ主催事業等を実施している中で、今回若年層へのアプローチという課題解決の一步として「おんかつ」に参加された。事業を担当された渡部さんから事前に共有された課題では、町田市は、中心地は確かに発展しているが、一方で自然が残る郊外の過疎化が著しい一面も持ち、若い世代の流入はあるが、若者が定着する街づくりが課題として挙げられた。ホールの来場者も高齢化という同様の課題を持っており、この課題解決のために、将来のホール鑑賞者を育てるという目的で、今回は、小、中学生を対象とした活動を行うこととなった。

アーティストは、ソプラノの竹多倫子さんが選ばれた。新型コロナウイルス感染症の影響により、集客に影響が出る音楽を敬遠するホールが多い中で、4月にトッパンホールで開催された公開プレゼンテーションにおいて竹多さんが発した、コロナ禍で色々な制約がかけられている人々の「心に光を灯したい」という熱いメッセージに渡部さんが心を打たれたことが決め手となった。

企画では、まずアウトリーチにおいて町田市の規模の大きさが弊害となった。町田市には、42の小学校と20の中学校があり、一学年が100人を超えることも珍しくない。そうした状況の中でも、実施する学校の子供たちにはしっかりとクラシック音楽を聴いてもらうというおんかつの方向性を守ために、4回のアウトリーチは、金井中学校の2年生（3回）と金井小学校の支援学級（1回）に絞って実施することとなった。コンサートもこうした規模感を考慮し、届けたい対象を明確にしたコンサートタイトルをつけ、はっきりとしたコンセプトが打ち出された。

金井中学校の2年生を対象に行われたアウトリーチでは、実施校からキャリア教育の要素を入れてほしいという意向もあり、竹多さん自身の生い立ちとその都度テーマとなった作品を紹介していくプログラムで実施された。ワーグナーのアリアなどのクラシック音楽に加えて、ディズニーミュージカルや久石譲の「Stand alone」など中学生の心に響くメッセージ性の高い作品を交え、なぜ音楽家になったのか、そして、どのように自分の心と向き合いながら音楽家を目指すという選択に至ったのかを大人へと成長段階にいる中学生に丁寧にコミュニケーションを取りながら伝えられた。竹多さんの強い想いが込められた演奏に中学生はもとより、周りにいた先生方もうっすらと涙を浮かべていたのが印象的だった。

金井小学校の支援学級でのアウトリーチでは、中学校のプログラムとは打って変わって、「動物」をテーマにしたコミカルなプログラムを実施した。今回、共演者として全公演出演されたピアニストの石塚幸子さんと一緒に猫耳をつけて猫になりきりながら、オリジナルのストーリーでロッキーニの「猫の二重唱」を演奏するなど全体を様々な物語仕立てで展開した。1～6年生という幅広い年代の子供たちがいたが、それぞれが立ち上がったたり、自由に拍手したりするなど様々な反応が見られ、充実した内容となった。

コンサートは、子ども向けということで公演時間を1時間とし、小学校のアウトリーチで見せたコミカルな動物の物語を前半に置き、後半では中学校で演奏されたメッセージ性の高い作品の演奏で構成された。平日の夕方という時間帯で実施したことで集客には苦戦したが、ホールでの音響の美しさや照明の演出も入り、アウトリーチよりもさらに充実した公演となった。

今回、私が改めて感じた点は、自主制作の意義である。小中学生をターゲットにしたアウトリーチとコンサートの企画制作のために企画段階からアーティスト等と一緒に練り上げていくこのやり方では、実施するジャンルの知識と実践経験が制作者に求められるが、地域の課題解決に直結した事業を作り上げることができる。今回、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、集客面を含め事業の波及効果が課題として浮かび上がったが、地域の課題に積極的に向き合う方法として、今回のような手作り感のある自主制作事業を今後もさらに発展して行って欲しいと感じた。今後のポプリホールの事業展開と渡部さんの活躍に期待したい。

実施団体：北杜市

実施時期：令和3年12月9日（木）～令和3年12月11日（土）

出演アーティスト：齊藤一也（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：心に描くクラシック

期 日：令和3年12月9日（木） 10：45～11：35

会 場：明野中学校 茅ヶ嶺ホール

参加者：3年生 40人

曲の情景などを自由にイメージしながら聞くことの大切さを伝えた。校歌をアレンジした演奏では生徒たちの反応が大きかった。コロナ禍により、ピアノの近くに集まることができなかつたため、ビデオカメラを使用し手元をスクリーンに投影しながら演奏した。アーティストからの呼びかけにも反応が良く、和やかな雰囲気の中で進行した。最後は生徒から感想が伝えられ、中には感動して涙を流す生徒もいた。

タイトル：心に描くクラシック

期 日：令和3年12月9日（木） 14：30～15：20

会 場：長坂中学校 白藤ホール

参加者：1年生 54人

曲を自由に聴いて感じてもらうことを軸に、生徒たちの感想や意見などを求めながら進行した。中学生という多感な時期を迎えている生徒たちに、エールを送ってほしいという校長先生からの事前のリクエストがあった。ピアニストになるため努力した経験や、夢をあきらめないことの大切さを生徒の目線に立ち伝えていただいた。音楽を通して生徒たちの心に響く貴重な機会を提供できた。

タイトル：心に描くクラシック

期 日：令和3年12月10日（金） 10：55～11：40

会 場：明野小学校 音楽室

参加者：6年生 26人

音楽室、控室に児童からのメッセージと装飾が飾られており、この日を楽しみにしていたことが伝わってきた。わかりやすい曲の説明や、小さなオルゴールを使用してのピアノの紹介等、小学生にもわかりやすい内容であった。児童たちは少し緊張した様子で、アーティストからの呼びかけに反応は少なかったが、演奏を聴く姿勢・ピアノを集中して見つめる姿は印象的であった。後日、児童全員から感謝の手紙が届いた。



タイトル：心に描くクラシック

期 日：令和3年12月10日（金） 14：30～15：20

会 場：長坂中学校 白藤ホール

参加者：2年生 55人

初めに、「ワレンシュタットの湖で」「水の戯れ」の2曲を演奏し、同じ水をテーマにした曲でもどのように違うのか、情景などを自由にイメージしながら聞くことの大切さを伝えた。この学校の合唱祭等で馴染みのある「大地の歌」を即興で演奏し、いつもと違うアレンジされた曲に、生徒たちの反応が大きかった。最後に生徒から質問や感想が伝えられ、関心を持って聞いていたことが伺えた。



コンサート

タイトル：齊藤一也ピアノリサイタル 北の杜に響くクラシックの調べ

期 日：令和3年12月11日（土） 14：00～16：00

会 場：八ヶ岳やまびこホール

参加者：150人

北杜市の風景写真をスクリーンに投影しながら演奏する演出を行い、曲の情景や心情を自由にイメージしながら聴いてほしいという思いを伝えながら進行した。アーティストのMCに対して、笑い声や関心の声が出るなど、温かい雰囲気コンサートとなった。誰もが聞いたことがあるクラシックの名曲や、即興でのクリスマスメドレーなど子供やクラシック音楽初心者の方も楽しめるプログラムであり、多くの来場者に好評であった。



① 応募の動機・事業のねらい

北杜市は音響効果に優れたホールを有し、クラシック等のコンサートを行っているが、来場者はリピーターが多く、ホールに足を運んだことがないという市民も多い。

音楽が非日常ではなく日常にある身近なものであることを知ってもらい、子供から大人まで年代問わず、音楽の楽しさ、素晴らしさを感じてもらえるような事業を行いたい。

② 企画のポイント

北杜市の写真を投影しながら演奏し、曲の情景や心情を自由にイメージしながら聴いて感じてもらうことを軸に置いた。

12月開催ということもあり、クリスマス曲など誰もが知る名曲等を演奏することで、子供やクラシック音楽初心者の方々にも楽しんでもらえるような企画とした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・新型コロナウイルス感染症対策、撮影許可
- ・プロジェクター・スクリーンを使用しての写真投影

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・アクティビティ先の新型コロナウイルス感染症対策や、撮影許可については、学校側としっかり協議することにより信頼関係を築くことができ、安心して実施することができた。
- ・写真投影については、初めての試みであったが、コーディネーターの赤木さんを始め、佐野さん、崎山さんから方法やアイデアをいただき、問題を解決しながら進めることができた。

⑤ 事業を実施しての成果

アーティストやコーディネーターと、ひとつの公演を作り上げていく課程や手法が大変勉強になった。コンサートでは、齊藤さんの演奏に対し高い評価をいただいた。定期的に開催してほしいという声が多く、アーティストの魅力や音楽の素晴らしさを伝えられたと感じている。また、舞台照明・写真投影・演出についても、これまでと違った取り組みであり、来場者に大変好評であった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

担当の経験が浅いということもあり、企画・立案、準備等に時間がかかった。アーティストに対しても、具体的にコンサートのテーマなどを伝えられれば良かった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

山梨出身のアーティストということもあり、コンサートを楽しみにしている方々がとても多かった。齊藤さんの演奏はもちろん、親しみやすい人柄に触れていただけたことで、またコンサートに行きたいという来場者の声が多かった。この事業を通じて、音楽の素晴らしさや生の音楽の魅力が伝えられ、ホールへ足を運んでもらうきっかけ作りになったと感じる。

北杜市は、山梨県の北西部にある長野県南部と接する人口4万4千人の市である。県内の自治体としては一番大きい600km²強の面積を持ち、八ヶ岳や甲斐駒ヶ岳、瑞牆山、金峰山といった山々に囲まれた自然豊かな地域であり、日本一の名水の里(日本名水百選の八ヶ岳南麓湧水群、白州・尾白川、金峰山・瑞牆山源流の3カ所を有し)や、歴史的町並み、滞在型温泉地、高原リゾート地など豊かな資源を持つ。「人と自然と文化が躍動する環境創造都市」を掲げ市政を展開している。

今回の舞台となる八ヶ岳やまびこホール（高根ふれあい交流ホール）は、2002年に高根町（2004年に合併し北杜市となる）に建設された。カラ松を大胆に用いた急傾斜の切妻屋根が印象的な木造建築で、木の温もりや優しさから非常に心地よい響きが特徴的な、市が直轄運営する施設である。

北杜市市民に、クラシック音楽が非日常ではなく日常にある身近なものであることを知ってもらい、音楽の楽しさ、素晴らしさを感じてもらえるようにしたいと考えられた本企画は、隣の韮崎市出身で、CDの録音をこの八ヶ岳やまびこホールで行い、また出演も幾度している、地にゆかりのあるピアニスト齊藤一也さんをお願いされた。アクティビティは、小中学生を対象に、良質な音楽に触れることで、音楽に関心を持ってもらうことを目的として計画された。その発案を受け、音楽からどんなイメージを受けるか、それは自由であってそれぞれが多種多様なものを思い描いて、それをきっかけに親しみやすく身近な存在となるようにとアクティビティとコンサートのプログラムは練られた。

明野小学校、明野中学校、長坂中学校（2回）での4回のアクティビティは、基本的には同じ流れで作られ進められた。小学校では、初めてピアニストの演奏を聴いたという児童も多く、いつもの音楽室のピアノから違う音がするというような驚きの表情も見受けられた。中学校では、自身の進路体験、ピアニストになるのを目指していく過程できっかけになった曲などを説明しながら演奏を展開していき、地元の出身の先輩ということもあり多くの共感があったように見受けられた。情景を思い浮かべイメージを沸かし、心情まで掘り下げ、自由に聴いて感じる「心に描くクラシック」を様々な角度からアプローチすることができ、感想文にはいろいろなイメージをできたことが多く書かれておりとても意義があった。印象に残った曲は、校歌（長坂中学校ではよく歌われる曲）のアレンジ曲（即興演奏曲）で一番多く、身近な情景を各々に思い浮かべながら、色々な要素を感じられ、導入としてとても興味を惹きつけて好印象であった。しかし、ピアノのメカニズムの説明や、前述の進路の話など内容が盛り沢山であり、詰め込みすぎで時間も不足し消化不良になりかけていたのが残念ではあったが、当初の目的通り関心は持ってもらえたと思う。

コンサートも、トークを交えながら自由にイメージを沸かせようと構成された。特に主催者からのリクエストであった北杜市の名所の写真をスクリーンに投影し音楽と合わせて観賞してもらおうという部分は、地元が誇る大自然をイメージしながら曲を聴き、鑑賞者にとってクラシック音楽がとても身近な存在になるきっかけとなり、コンサートは親しみやすく和んだ印象になった。しかしながら、もう少し時間をかけて主催者、北杜市に寄り添う様な情景の思い浮かべさせ方があったのではないかと、また、コンサートの時間が2時間を超え少し散漫になったことなど課題は残る。

クラシック音楽を身近に、そして楽しさや素晴らしさを感じてもらえた3日間だったと思う。今回とても印象的なシーンは、担当者の小尾さんが舞台袖で食い入る様に本番を見ていた場面だった。ご本人はクラシック音楽が詳しくなく、今年度から担当になり右も左も分からずとても大変だったのではないかとと思うが、ご本人がテーマを、クラシック音楽の力を一番体感できたのではないかと感じる。また、もう一人の担当者の小泉さんの母校である小中学校でのアクティビティでは、母校と地元への思いや誇り、そしてつながりを感じとても良い光景だった。

コロナ禍の中、人との繋がりが分断され、交わりがとても難しい時代になっている。Withコロナ／

After コロナへの時代へ、今回の経験を糧に、地域社会での繋がりや内外での交流のきっかけに、同じ空間や経験を共有する音楽を活用していき「つながる」交流のまちづくりへと活かして欲しいと思う。北杜市が、人と自然と文化が躍動する杜、さらに魅力ある地域になることを心より期待したい。

実施団体：日高川町

実施時期：令和4年2月16日（水）～令和4年2月17日（木）

出演アーティスト：梅津 碧（ソプラノ） 小埜寺 美樹（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：本物のクラシック音楽との文化交流

期 日：令和4年2月16日（水） 10：30～11：20

会 場：早蘇中学校 視聴覚室

参加者：全校生徒 21人

早蘇中学校の全校生徒を対象にアクティビティを実施しました。当初は、アーティストが学校を訪問し対面形式でのアクティビティを計画していましたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け、急きょネット中継により生徒とアーティストを繋ぐ非対面形式への変更となりました。

ネット中継では音質や画面のクオリティが保証できないため、歌声やその様子は事前にDVD収録し、それを生徒たちの前で放映し披露する形としました。ネット中継によりアーティストと生徒を繋げることで、DVD収録した曲へのアーティストの思いやそれを視聴している生徒たちの様子等をお互いがリアルタイムで感じ取りながらアクティビティを行うことができました。

はじめ生徒たちは少し緊張している様子でしたが、アーティストが校歌をネット中継上で歌ってくれ、それを聞いた生徒たちは自分達が慣れ親しんでいる曲の登場に大変喜んでくれました。アクティビティが終わるころには生徒たちは楽しそうな様子でアーティストと接してくれていました。

タイトル：本物のクラシック音楽との文化交流

期 日：令和4年2月16日（水） 13：45～14：30

会 場：和佐小学校 音楽室

参加者：17人（5年生 11人、6年生 6人）

和佐小学校の5、6年生を対象にアクティビティを実施しました。はじめ全校生徒を対象としていましたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け対象人数を縮小し行いました。和佐小学校においても他校で実施したアクティビティ同様、非対面形式でDVDを視聴しながらネット中継によりアーティストと児童を繋ぎ行いました。

児童達は画面越しでもアーティストの登場に喜んでくれ、終始楽しみながら接していました。ここでも校歌を披露したところ児童たちの感触が良く、アクティビティが終わった後でも歌い方を真似し口ずさむ子もいました。



タイトル：本物のクラシック音楽との文化交流

期 日：令和4年2月17日（木） 10：40～11：25

会 場：中津小学校 6年生教室

参加者：6年生 13人

中津小学校の6年生を対象にアクティビティを実施しました。はじめ高学年生を対象としていましたが、新型コロナウイルス感染拡大を受け対象人数を縮小し行いました。中津小学校においても他校で実施したアクティビティ同様、非対面形式でDVDを視聴しながらネット中継によりアーティストと児童を繋ぎ行いました。

児童達はオランピアのアリア「人形の歌」でアーティストがゼンマイ仕掛けの人形に扮しながら歌っている様子をととても楽しげに笑いながら観ていました。



タイトル：本物のクラシック音楽との文化交流

期 日：令和4年2月17日（木） 13：45～14：30

会 場：川原河小学校 音楽室

参加者：全校生徒 18人

川原河小学校の全校児童を対象にアクティビティを実施しました。川原河小学校においても他校で実施したアクティビティ同様、非対面形式でDVDを視聴しながらネット中継によりアーティストと児童を繋ぎ行いました。

アクティビティが終わった後、児童の代表がアーティストに感謝の気持ちを伝えてくれて、ネット中継ながら両者の交流が出来て良かったと実感しました。



コンサート

タイトル：梅津碧コンサート

～つれもていこら本格クラシック音楽～

期 日：令和4年2月19日（土） 14：00～16：00（開場13：30～）

会 場：日高川交流センター ホール

参加者：

新型コロナウイルス感染拡大を受けコンサートは中止となりました。

致し方ないとはいえ、アーティストとの日程調整、コーディネーターの現地下見の実施、そしてコンサートのチラシ・ポスターを作成しチケット販売していた中でこのような結果となりとても残念に感じました。

① 応募の動機・事業のねらい

当会館は開館後10年を経過しておりますが、本町におきましては残念ながら本物の文化芸術に触れる機会が少なく、住民の文化事業に参加するという意識が薄い傾向にあります。今回の事業を通して、当館に親しみを持っていただき足を運んでいただくきっかけにするとともに、住民の皆様の文化水準の向上に繋がりたいと思い取り組みました。

② 企画のポイント

アクティビティは、町内の小中学校で学校単位やクラス単位など、学校の実情に合わせた形での実施を計画しました。プロのアーティストの演奏を聴いてもらうことにより生徒児童達の表現力や感受性を養い、また交流や体験を通じて少しでもクラシックに親しみや興味を持ってもらえたら良いと思い企画しました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

新型コロナウイルス感染拡大を受けコンサートは中止となりましたが、アクティビティはネット中継でアーティストと児童生徒達とを繋ぎ交流できないかということになりました。

今までそのようなことを行った前例がなかったので、ネット環境の確認、機材の準備、学校側との調整などゼロからのスタートのなかで行うことになりました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

学校へ何回も出向き、ネット環境を確認しながら機材等の設置を行いました。念のため、本番のアクティビティと同じ環境下での仮テストも数回行いました。また、ネット回線では音質・画質のクオリティが保証できないので歌声やその様子はDVD収録し児童生徒の前で放映することにしましたが、そのDVD収録等を専門業者にすべて委託（収録及び編集、DVDにして納品）することでこちら（会館側）の業務負担を軽減でき、また専門業者に任せることでDVDも良い仕上がりで完成することが出来ました。

⑤ 事業を実施しての成果

新型コロナウイルス感染拡大を受けコンサートは中止となりましたが、アクティビティだけでもネット中継などにより実施できないかということになり、実施検討に入る際にコーディネーターやアーティスト側に助言・協力を頂き事業を進めることができました。

このようなかたちで児童生徒達とアーティストを繋ぎ交流が行えたことは実例としてとても良い経験となりました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アーティスト側とどのようなアクティビティ内容にするかを事前に詰め切れてなかったので、どう話を進めていけばいいか不安がありました。

実際にアーティスト、コーディネーターが現地入りし、直前の打合せ会議を開く中でコーディネーターが話しを進めてくれ、アーティストのコンセプトとこちらの意見などうまく調整しながら事業の構成をしていただきました。

引き続き支援事業も行うので、この経験を生かしアーティストのコンセプトとこちらのテーマなどを両者の思いをうまく調整しながら事業を進めていかなければと感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業を通じて、本格的なクラシック音楽が児童生徒達にどのように伝わるかに不安がありました。普段からあまり馴染みがないため、こちらの一方的な思い（色々な本格的文化芸術に触れてほしい）で終わってしまうかもしれない。

しかし、その不安は実際アクティビティを通して消えました。子供達の反応はとても良く、オペラを口ずさむ子までいました。

この経験はとても参考になり、あまり馴染みのない本格的な文化芸術でも十分受け入れられるし、楽しんでもらえる。

それは、こちらからの伝え方、事業の構成次第で如何様にもなり、多くの人に文化芸術に触れ楽しんでもらえる機会を提供することが出来ると思いました。

毎年のように綴っている気もするが、今年ほどこの言葉を噛み締めた事がないので、書き留めておきたい。“おんかつは人”。抽象的すぎる言葉ではあるが、今回担当した日高川町はこの言葉を具現化したようなおんかつであった。ホールと地域、アーティスト、コーディネーターこのトライアングルの関係に化学反応を起こすことが出来るか否か、そこにおんかつの成功がかかっていると改めて確信した。

○はじめに

日高川町は、平成17年5月1日に川辺町、中津村、美山村の3町村が合併し、日高川町が誕生した。中央部を日高川が流れ、総面積の約90%が森林である。和歌山県の総面積の約7%を占め、県下で3番目に広い面積を有する。

今回の会場は日高川交流センター。主担当の龍田さんは、町民の方に世界的に活躍しているソプラノ歌手の梅津碧さんの声を是非お届けしたい！という強い願いのもと、早い段階から非常に熱心におんかつに取り組んで下さった。しかし、新型コロナウイルス変異株・オミクロンの影響を受け、残念ながらコンサート、対面でのアクティビティは中止となり、演奏のみ事前収録という形に変更することになった。

詳しくは後述する。

○アクティビティ

上記の通り、当初は小学校3校、中学校1校での実施の予定だったが、演奏のみ事前にホールにて収録、対象者との受け答えのみZOOMで行うという形で実施された。

経緯について少し記述する。1月19日に龍田さんより事業中止のご連絡を頂いたが、即座にコーディネーターの仕田さんから代替案を探してみるのはいかがでしょうか？とご提案があり、上記の形をとることになった。当初の龍田さんの願いでもある、梅津さんの声をお届けするという願いは達成されなかったが、この状況下でのベストを尽くそう！という想いのもと、ホール、アーティスト、コーディネーターのタグがより一層強くなったのを感じた。そこからは、龍田さんをはじめとするホールスタッフの皆様を中心に、学校との連携、演奏のクオリティの担保をどうするのか、様々な立場の方が尽力して下さい、実施できることになった。

アクティビティ当日は、朝早くからホールスタッフさんが学校入りし、機械の調整を整え、万全の体制で行われ、大きな問題もなく実施することが出来た。唯一心配していた、対象者との双方向性についてだが、時間が経つにつれ段々と打ち解けてきた様子が画面からも伝わり、次回は是非対面で演奏をお楽しみください！といった次の機会に繋がれるととてもいい機会になったと実感した。

○さいごに

最終日に伴奏者の小笠原さんが放った言葉、“この状況だからこそできることがあるんですね”という言葉が忘れられない。いかなる状況になったとしても、その状況でできることに最善を尽くす。すると、その状況だからこそ起きる化学反応もあり、それを楽しめるかどうか。今回は、上記の方法をご提案下さったコーディネーター仕田さん、それに対して前向きに取り組んで下さったアーティスト梅津さん、マネジメントさん、そして何より、龍田さんをはじめとするホールの方々の熱いパッションに心から賛辞を贈りたい、と同時に、今回の機会を必ず次に繋げてほしいと切に願う。

実施団体：公益財団法人 中間市文化振興財団

実施時期：令和4年3月11日（金）～令和4年3月13日（日）

出演アーティスト：新野 将之（打楽器） 齋藤 綾乃（打楽器）

アクティビティ

タイトル：新野将之パーカッション♪アラカルト in NAKAMA
～楽しい音との出会い～希望が丘高等学校

期 日：令和4年3月11日（金） 11：15～11：55

会 場：希望が丘高等学校 音楽室

参加者：1年生 19人 2年生 2人

音楽系列・教養系列の1年生・2年生21人の追試時期の自習時間にアクティビティをさせて頂いた。最初は新野さんのライオンキングを思わせるような迫力のある演奏の入りに圧倒されたのか反応が薄く元気がないように感じたが、アクティビティが進むにつれてだんだん表情が明るくなり反応が出てきた。終わってから新野さんに打楽器の事で質問したり齋藤さんにも声をかける生徒が見受けられた。元気になったと手を上げる生徒が多数だった。

タイトル：新野将之パーカッション♪アラカルト in NAKAMA
～楽しい音との出会い～ケアハウスゆうあい録画

期 日：令和4年3月11日（金） 14：00～16：00

会 場：なかまハーモニーホール 大ホール舞台

参加者：

今回アクティビティ先としていた老人福祉施設「ケアハウスゆうあい」であったが、直前になって新型コロナウイルスの感染状況が回復しない事から断念せざるをえなくなった。しかしここまで準備してきた経緯や今後のケアハウスゆうあいとの関係を良いかたちで繋げていくためにも、今回のプログラムをビデオ撮影して、お届けしようと決まった。

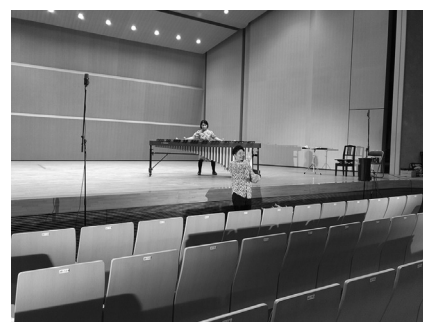
タイトル：新野将之パーカッション♪アラカルト in NAKAMA
～楽しい音との出会い～楊名時太極拳・フラダンス

期 日：令和4年3月12日（土） 11：00～11：45

会 場：なかまハーモニーホール 大ホール舞台

参加者：サークルメンバー 14人

なかまハーモニーホールで毎週定期的に行われているサークルのメンバーの方々に出来るだけの参加をお願いした。皆、新野さんの迫力ある演奏や問いかけにとっても反応していた。身体を動かす事で喜びを感じていらっしゃる方々なので、特にボディパーカッションの身体を動かすところは皆さんの表情が生き生きしていた。また、打楽器のメロディーでどんな情景が浮かぶのかなど、感じ方がそれぞれ違ってとても楽しまれていた。



タイトル：新野将之パーカッション♪アラカルト in NAKAMA
～楽しい音との出会い～中間市民図書館

期 日：令和4年3月12日（土） 14：30～15：15

会 場：中間市民図書館 多目的室

参加者：子供とその保護者 28人（子供9人 大人19人）

参加者の内訳としては、子ども連れの方（家族）と大人だけの参加も多かった。新野さんが色々な物を打楽器に見立てて音を立て始める入りで、子供たちは興味をもって耳を澄ませてじっと音を聴いたりジャンプしたりする子もいた。映像では親子で語り合う様子がみられた。迫力の演奏の後、朗読に合わせた太鼓のオリジナル演奏「たいこうちたろう」で大人も子供も見入っていた。子供に合わせたプログラムであったが、大人も楽しんだと思う。



コンサート

タイトル：新野将之パーカッション♪アラカルト in NAKAMA
～楽しい音との出会い～

期 日：令和4年3月13日（日） 14：00～15：45

会 場：なかまハーモニーホール 大ホール

参加者：高校生までの子供と保護者 125人

対象者として小さな子供から大人（その保護者）までを設定した。プログラムはアクティビティの要素を含んだ第1部で、席を立って打楽器の音色に合わせてボディパーカッションを体験したり楽器の起源や身近な楽器の仕組みや奏法をトークを交えながら進行した。第2部では、大人も楽しめるメッセージ性がある曲やコンテンポラリーダンスと太鼓を融合させた曲などで構成されていた。



① 応募の動機・事業のねらい

昔からお祭りが大好きな中間市の住民の皆さんに元気を少しでも届けたいと考えました。この事業をさせて頂くに当たって楽器としては太鼓の音に親しんできた事からも打楽器しかないと思いました。中間市内の様々な所にいる皆さんに新野さんの多様な打楽器の演奏をお届けして、またこれをきっかけに今後もアクティビティ先とも更なるコミュニケーションをとっていけたらと考えました。

② 企画のポイント

アクティビティ先としまして子育て中の保護者、高齢者、多感な高校生、なかまハーモニーホールの利用者としました。本公演でも子供も楽しめるようにして頂き、大人にも小さな子供もいる事にご理解いただいた上でコンサートを楽しんで頂きたいと考えました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

コロナ渦の中、この企画に賛同はして頂けても、実現は難しいと判断されてしまったら受け入れるしかなかった事が苦勞だったかと思います。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

ひたすらアクティビティ出来そうなところを探しては交渉するという感じでしたが、何とか当初4ヶ所は決まりました。ただ直前になって、老人福祉施設は、コロナの為やむをえず出来ない事になり、結果3ヶ所となりました。この老人福祉施設には新野さんの演奏を録画し、お届けする事になりました。

⑤ 事業を実施しての成果

この事業をきっかけに、これからもお付き合いを続けていまいしょうと2ヶ所（中間市民図書館・ケアハウスゆうあい）に言って頂けました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

本公演での年齢設定が、自分の思惑とは違って、無理があったと思われました。もっとターゲットを絞ってまず本公演からどのようにしたいと考えるか。それからアクティビティ先を考えていくと良いと考え直しました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回、おんかつを通してホールを出て中間市の方たちと関わらせて頂いて、まだまだたくさん可能性はあると感じました。市民の方がもっとなかまハーモニーホールに興味をもっていただける事も大事だと思います。

アシスタントレポート

古橋 果林（音楽ワークショップ・リーダー／ファシリテーター、
東京藝術大学国際芸術創造研究科 教育研究助手）

福岡県北部に位置する中間市は4 km四方に約4万人が住み、炭鉱の街から快適な住宅都市へと発展してきた市である。今回の“おんかつ”の舞台となったなかまハーモニーホールは、748席の大ホール、350席収容可能で移動式観覧席を有する小ホールに加え、展示室や会議室を持つホールである。進む少子高齢化や人口減少で時代とともに中間市の元気が無くなっていると感じる担当者の山田さんは、“おんかつ”を通して市のキャッチコピーである「元気な風がふくまちなかま」に貢献したいと考えていた。

そんな中間市の“おんかつ”は、事業全ての中止は免れたものの、アクティビティの1つが中止を余儀なくされるなど、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた形での実施となった。筆者自身もいざ中間市入りをする直前に濃厚接触者となってしまい、アクティビティに同行できなくなるなど悔しい思いをしたが、それ以上に担当の山田さんは準備期間から本番まで、この社会情勢の影響を受け様々な制約の中で事業を進めてこられた。感染症対策のためホールの出勤体制は通常のものとは異なるほか、出勤時は事業以外の仕事も担当する必要がある「思うように事業の準備が進められない」というのが山田さんの大きな悩みの一つであった。それでも、自身が打楽器奏者の新野将之さんの演奏に大きな感銘を受けたことから、中間市民に新野さんの打楽器の演奏を届け、中高年市民には中間市に古くから響く盆踊りやお祭りの太鼓の音を思い出し、若い世代には音の刺激を感じてもらいたいという強い思いを貫き、懸命に取り組まれていた。

アクティビティは希望が丘高等学校、中間市民図書館での公演、楊名時太極拳・フラダンスサークルを対象としたホールでのインリーチを実施したほか、中止となったケアハウスゆうあいいには演奏を収録したDVDを届けた。筆者は同行ができなかったため詳細の記述は避けるが、DVD収録を含めた4つの公演それぞれが異なるプログラムを展開し、打楽器の魅力を多様に伝えるアクティビティとなった。

ホールでの本公演では、前半は打楽器の基本的な魅力を伝える内容となり、観客が参加できる楽曲も演奏された。後半は打楽器の魅力をより深く届ける内容として、音源とともに演奏される曲やコンテンポラリーダンスを取り入れた作品など、本格的な楽曲が演奏され濃密なプログラムになったと言えるだろう。

一方課題として見られたのはコンサートの対象設定である。山田さんは当初から子どもから大人まで中間市民に広く音楽を届けたいという思いが強く、本公演も幅広い層が入場できる形で行われた。実際にコンサートには小さい子どもからお年寄りまで幅広い層の市民が訪れ、1部の参加型の楽曲では様々な年代の人々が一緒になって音楽を楽しむ様子がみられた。一方で2部の本格的な楽曲では、演奏をじっくり聴きたい大人が騒いでしまう子どもに舌打ちをしてしまうなど、幅広い人を対象とするが故にまねきやすい残念な場面も見られた。明確な対象の設定はコンサート、アクティビティを行う上で非常に大事な部分であるが、一方で公共ホールとして事業を実施する以上「より多くの人に」という視点を持つことも自然なことであり、一筋縄ではいかない。しかしながら、山田さんは今回の“おんかつ”を通して、「思い切って対象を絞る」ということが様々な人が音楽を心地よく楽しむためには、時には必要であることを経験を持って実感され、今後の事業企画に活かされるのではないだろうか。

この2年、我々は新型コロナウイルス感染症という病に大きく振り回されてきた。上述の通り中間市の事業においてもそれは例外ではなく、担当者の山田さんにとっては「思いどおりにいかない」ことだらけだっただろう。我々はこの感染症の拡大により、ある種“不自由な”形で事業を進めるほかなく、一刻も早く事態が収束することを願うばかりである。だが、よく考えてみれば事業を実施する上で全てが「思いどおり」にいくことなど、ほとんどないのではないだろうか。想定していないことが起こり、それを様々な人々が関わりながら解決し、乗り越えていく、その上で事業が成り立つことがほとんどなのである。中間市においては、この厳しい社会情勢の中でおんかつ事業を実施し遂げたという実績を糧

としながら、その中で見えてきた反省点、課題を活かし、これからも多々遭遇するであろう「思いどおりにいかない」局面を乗り越えていかれることと期待したい。

第3部
令和3年度公共ホール
音楽活性化事業(おんかつ)
コーディネーター・
アドバイザーレポート

アウトリーチを活用する力 その③ 公共ホールの持続可能性 ～ シナジーと人材育成

1. 持続可能性の3つの要素 ～ 経済性・社会的役割・環境問題 ～

持続可能性の重要な要素は、一般的には『経済性』『社会的役割』『環境問題』の3つがあります。『公共ホールにとっての持続可能性』を考えるにあたっては基本的には同じだと考えています。では、公共ホールにおける『経済性』『社会的役割』『環境問題』とは、いったいどのようなものなのでしょう？以下のとおり考えてみました。

2. 公共ホールの『経済性』

公共ホールの『経済性』のなかで最も大きな柱は集客（入場料収入）だと思います。これは、公共ホールにとって“最大の強み”でもあり“最大の弱み”でもあるように思います。チケットが売れる。多くの観客が来てくれる。などは、劇場としても、公共施設としても、とても大切なことです。日頃からチケット販売数に一喜一憂しているスタッフも多いのではないのでしょうか？

これらを『公共ホールの持続可能性』の視点から考えると、時には目先の成功をギャンブル的に追い求めていくことも必要ですが、まずは10年後の成功のイメージを設定して、現状から成功へ。少しずつでも良いので確実に近づけていく。数値と実感が伴う成果を出していくことが大切なのではないかと考えています。

加えて、“経費の節減”も重要な要素だと考えています。上質な芸術活動を維持しながら経費を抑えることができれば、きっと説得力のある『強み』を獲得することができるでしょう。ただ、この“経費の節減”については、多くの公共ホールが苦手としているのではないかと感じています。

3. 公共ホールの『社会的役割』

CSRからの流れもあってSDGsでは『社会的役割』へも注目が集まっています。

公共ホール界においては、CSRやSDGsとは別の流れで90年代後半頃から“ミッション・ビジョン”に注目が集まり、その後は“ミッション・ビジョン”を達成するための具体的かつ個性的な活動に取り組むホールも増えてきて、近年では、そうした活動の“評価”“検証”まで行われる時代になってきました。

公共ホールの『社会的役割』や『ミッション・ビジョン』は、ホールや地域によって違いますので一概には言えませんが、ざっくりとえば“公共ホールが地域の一員になり、その地域を取り巻く課題の解決のために取り組む活動（役割）”と言えるのではないのでしょうか？公共ホールは、劇場と公共施設の両方の性格を兼ね備えていますので、持続可能性・SDGsでなくても求められる重要な役割だと考えています。

4. 公共ホールの『環境問題』

ごめんなさい。環境問題については、僕は詳しくないです。

（元滋賀県民として）個人的には琵琶湖に優しい洗剤やせっけんを選ぶ癖はついておりますが、公共ホールで働く者としては、紙やインク、電力など事業活動のなかで大量に使うものについて工夫していくことが大切なのではと考えています。

5. アウトリーチは活用する時代 ～ シナジーを生み出せる人材 ～

さて、ここまで『公共ホールの持続可能性』の3大要素について考えてきました。どれも“必要性は理解しているが実際に行うのは難しい”というものばかりだと思います。

前述のとおり、公共ホール界では、90年代後半頃から『ミッション・ビジョンが大切』という考え方が広がり、今では一般的になりました。その間、国際社会ではCSR、SDGs、持続可能性というキーワードが生まれ、世界中へと広まりました。

“経済活動と社会問題、環境問題のバランスが求められる国際社会”と“芸術活動と社会的役割が求められる公共ホール”。一見、遠く離れているように見えますが、実は密接に繋がっていると思います。

いきなりそんなことを言われても不安を感じる人も多いと思いますが、公共ホール界には『ミッション・ビジョン』や『WSやアウトリーチ』といった考え方や手法が既に確立され、広がり、定着しています。それらを上手に結び合わせていけば時代の変化に適応していくことができると私は考えています。

WSやアウトリーチは、

- ① 効果的で優良な広報活動でもあります。
- ② 企画に多様性を生み、多くの方にアプローチできる手段です。
- ③ 『経済性』『社会的役割』など多様な領域にシナジーを生み出すことができます。

アウトリーチを活用し、シナジーを生み出す力 = 企画者の力量 = 人材育成が大切
と私は考えています。

一方で、これらは、一回の事業で達成できるような簡単なことではありません。

『継続と共有』を大切にして、世代を超えて受け継がれていくことが必要です。

アウトリーチを巧みに活用し、多様なシナジーを生み出していく、そんなアーツスタッフを多く輩出していく時代になっていくことに期待をしています。

令和3年度も昨年来の新型コロナウイルス感染症の影響から抜け出す事が叶わず、様々な制約の中で活路を見出すような運営が強いられた年だったと思う。既に二年以上のコロナ禍を経て、ようやく第六波のまん延防止等重点措置が解除されたものの、新規感染者数は著しい低下とはなっていない。クラシック音楽界では第六波によるイベント制限こそ実質的には受けなかったものの（観客が声を発しないイベントの人数上限5,000人未満は収容率・時短要請の制限が課されなかった）長引く水際対策により、いわゆる鎖国状態が継続されアーティストの国際往来が完全に停止となり、3月に入ってようやく緩和の兆しが見えたところにロシアのウクライナ侵攻である。まさに「一難去ってまた一難」、一進一退を繰り返し、トンネルの出口がなかなか見えない状況に業界全体が逼塞感に包まれている。

そのような中、この事業に応募いただいた地域の公共ホールの皆様には、かつてないほどの難しい事業運営に、本当に頭が下がる思いでもあります。

今年、私が担当させていただいた地域は福島県会津美里町と、山口県岩国市の二地域。

会津美里町は福島県の西部に位置し、平成17年会津高田町、会津本郷町、新鶴村が合併して誕生した新たな町である。そのシンボルとも言える町役場の新庁舎に併設された「じげんホール」と言う多目的ホールでの実施。運営は町の教育委員会が担っており、アウトリーチ事業もコンサートの開催も今回が初めてとの事であった。事業全体のテーマは「クラシック音楽愛を育む・郷土愛を育む」と言うもので、町内の高田・本郷・新鶴の各地域の中学校2年生を対象としたアウトリーチは、コロナ禍もあり学校には訪問せずに、じげんホールを会場として行った。コンサートでは、地元でIターンしたシンガーソングライターの青木真一さんが作曲した会津美里町町民の歌をコンセプトに、ピアニストの齊藤一也さんとの即興演奏や対談等を織り交ぜたユニークな企画。チケットは発売後数日で完売し、コンサート会場は満席のお客様を迎えて開催された。アンケートの回収率もかなり高かったようであるが、教育委員会の方からは、今回の事業を通じて、クラシックの観客層がいる事、町のホールの活用を望む一定層の住民がいる事が解ったとの感想が伺えた。このような手応えが今後の事業継続のキッカケになればと切に願っている。

岩国市は山口県の最東部に位置し、錦帯橋で有名な吉川氏の城下町。圏域として取らえると隣県の広島県との交流が色濃い地域で、市内には米軍岩国基地が存在する歴史と基地の町。岩国市は山口県が設置したシンフォニア岩国が全国的に有名であるが、今回は岩国市が設置した岩国市民文化会館を会場に、指定管理者の岩国市文化芸術振興財団としての実施である。県と市のホールが一定の商圈に併設すると言う非常に難しい運営が求められる地域でもある。そのような背景を踏まえ担当者が決めた事業テーマは「ホールに関心を持ちクラシック音楽を入口にライブ鑑賞の感動を少しでも増やすこと」である。ホールに来ない市民層の掘り起こしに向けて、市内の小学校2校、連合婦人会、ジュニア合唱団へのアウトリーチと、ジュニア合唱団の設立のきっかけになった岩国市歌を活用したコンサートを企画していた。派遣アーティストはソプラノの竹多倫子さん。彼女の気取らない雰囲気と笑いを交えたトークに魅せられた担当者は「竹多倫子のおしゃべりコンサート」をテーマと決めた。チラシも完成し、いよいよチケット発売を控えたタイミングで、新型コロナの第六波の予兆となるオミクロン株の急拡大により、米軍岩国基地を抱える岩国市を中心にまん延防止重点措置が発出され、ホールは休館、広報活動もままならない状況に陥ってしまった。仮に開催日直前に制限が解除されたとしてもチケット販売は停止の状態であつた受け入れ先の再開も見通せない状況では、最終的には事業の中止を選択せざるを得なかったのは重々理解しつつも個人的には非常に残念でならない気持ちだ。

コロナ禍の中、全国の様々な地域で住民の為に事業に奔走されている方々がいる中、今年は劇場・音楽堂法の制定から10年、去年は文化芸術基本法の制定から20年、それぞれの節目の年を迎えた。この文

化振興に関する重要な法律を背景に、劇場や芸術団体はより積極的に文化振興に取り組んでいるがその反面、地方において文化政策のための条例を制定している団体は都道府県、指定都市、中核市、市区町村全て併せて合計172団体（令和4年2月地方自治研究機構）とあまりに少ない。また、公共施設の運営に導入された指定管理者制度は、効率化や採算性、設置者負担と成果のバランスをどこに求めるのかと言った根本的な課題を浮き彫りにしている。コロナのリスクは人と人とのコミュニケーションの在り方を根底から覆すものであった。コミュニケーションは人間社会の基本であり、コミュニケーションなくして文化芸術は成立し得ないと私は思う。文化振興の基本理念を定めた法律制定の節目の年が、感染症に翻弄された二年でもある事を鑑みると、いかなる因果なのかを嘆息せずにはいられない。コロナ禍に屈せず、ホール設置者には文化政策への積極的な関与を、地域の拠点となるホールにはアーティストや芸術団体との連携を、文化事業は地域づくりにつながる積極的投資と言った視点を持っていただき、長期的視野で取り組んでいただきたいと願っているのは私だけであろうか。

おんかつのホールコンサートを実施する上で検討しなければならない課題の一つに、コンサートの対象を誰にするか、ということがあります。アクティビティが限定された人を対象に実施されるため、ホールコンサートでは「広く一般の市民の皆様向け」と希望されるホールがたくさんあります。それを否定するつもりはありませんが、「広く一般向け」の公演とは、言い方を変えれば「ターゲット不在」の公演となります。プログラムを組み立てるアーティストも、どの年齢層でも楽しめることを優先に選曲をすることになり、結果として無難な、それ故にインパクトの弱いプログラムになってしまう危険性を孕んでいます。これまで多くの公共ホールが「広く一般向け」のコンサート（公平機会均等を旨とする公共施設では一面当然なことなのですが）を実施してきましたが、その結果、来場者数の伸び悩み（もしくは減少）や、来場者の固定化に伴う新規聴衆の獲得や開拓の不発といった現状が見られます。

コンサートのターゲットを絞り込むことに抵抗を感じる方は多いと思いますが、思い切って対象を特定化することにより、ターゲット（＝来場者）のニーズやテイストにより合致した「まさに自分（我々）向けのコンサート！」と思ってもらえる公演を作ることができ、その結果、来場者一人一人のコンサート体験がより密度の濃いものになることも事実です。

中間市では、「本格的演奏を子供たちにも聴かせたい」ということで、ターゲットの年齢層を絞り込みきれないまま、大人から未就学児も入場可能なコンサートを実施されました。親子室のあるホールでしたので、小さなお子さんをお連れになったお客様には親子室をご案内いただいていたのですが、親子室の定員を超える数の子供の来場があり、演奏中、客席のあちこちに席を移動していたお子さんに対し、他のお客様が舌打ちされたのが舞台上のアーティストにまで聞こえてしまうというハプニングがありました。舌打ちされてしまったお子さんやその親御さんにとっても、鑑賞に集中できなかったお客様にとっても、そして自分の演奏を聴いて幸せな時間を体験してもらいたいと思っていた舞台上のアーティストにとっても、非常に残念な結果になってしまいました。

チラシ等の事前の告知には「小さなお子さん」も入場可能な公演であることは明記されていましたが、それが一般のお客様に伝わりきらなかったという点で事前の広報にも問題があったと思います。ですが、そもそも一口に「子供」といっても未就学児と小学生では理解度はもちろんのこと、対応力・集中力には歴然とした差があります。未就学児は言わずもがな、小学校低学年でも長時間静かに椅子に座っていることはとても窮屈なことです。我慢を強いられたり、親や周りの大人から叱られてしまっただけでは、おそらくその子供は「またコンサートに連れて行ってもらいたい」とは思えなくなってしまうでしょう。未就学児の入場を可能にした場合は、他の来場者の鑑賞の妨げにならないように注意することは当然のこと、その子供や親にとってコンサート体験がトラウマにならないよう、様々な対応や工夫が必要となります。

「メインターゲットは大人だが子供も入れる」コンサートという企画なら、心を鬼にして未就学児は入場不可に。その代わりに、未就学児も入場可能な「親子」をターゲットにしたコンサートもぜひ併せて企画していただき、多少子供が騒いでもお互い様ということで誰からも目くじらを立てられることのない、子供も親も心にゆとりをもって楽しめるコンサートも実施していただきたいと思います。

新しい聴衆を開拓してより多くの市民の皆様がホールに来てもらい、「コンサートっていいね」、「また聴きにきたいね」と思ってもらえるようにするためには、来場者の状況やニーズを正しく把握し、それに寄り添った内容のコンサート作りが必要となります。そのためには、勇気をもって対象者を絞り込むこと。そして「これは貴方のためのコンサートです！」とターゲットの市民に向かって明確に伝えられるよう、広報の仕方も対象に相応しいやり方を選ぶことが重要となります。

今年度のおんかつは3地域の担当をいただきましたが、1月のコロナ第6波の影響をうけて中止が相次ぎ悶々とする1月下旬を過ごしました。しかしながら、唯一12月に実施ができた大槌町においておんかつの原点回帰のような感覚を得、そして実施には至らなかったけれども川越市の武田さん、境港市の松本さんらのなんとかおんかつを実施しようとしてくださった熱意と行動にこの事業の意義を改めて考える機会にもなりました。みなさまのご尽力に心より感謝いたします。

岩手県大槌町は豊かな漁場を有する沿岸部に人口が集中している町で、旧役場跡地がテレビで映し出されることも多く、私が視聴した際の内容は震災で犠牲になられた一人一人に向き合っておられる町の姿でした。その跡地から道一本はさんだところに大槌町文化交流センター（愛称おしゃっち）があります。2018年にオープンし、2020年4月より指定管理制度に移行され一般財団法人おらが大槌夢広場のみなさんで運営されています。明るい陽が射す吹き抜けの開放的な空間ではスタッフさんとお話しに来られる方や、学校帰りに立ち寄る子どもたちが思い思いに過ごし、町の人たちとともに時間をきざんでいます。建物の外に出てみると、かさ上げされ整備された地面が広がり真新しい住宅や商店が並んでいます。そう、何もかもが新しい。

下見で大槌町に伺った際「10年経って、ようやくコンサートができるまでになりました」とおっしゃいました。この言葉にこめられている背景は想像することしかできませんが、この境地を共にすることの重みはリアルにずしりと感じたことを覚えています。

大槌町おんかつはコロナの影響を回避できるよう、赴くのではなく迎える形で企画を組みなおしました。ご担当は、前向きさと慎重さを兼ね備えながら天然な言動がなんとも魅力的な生利さん石川さん佐野さんのお三人。そんな皆さんが選んだアーティストは打楽器の新野将之さん。

大槌町おんかつではアクティビティ、コンサートともに図書ボランティア「このゆびとまれ」さんとの共演を企てました。これは新野さんが「うんぽーこ」という音楽付き朗読作品を自作されていること、そしてこの作品自体に新野さんが強いメッセージを込められていることから、きっとお互いが作用して良い形になるだろうと思いました。このゆびとまれのみなさんとは、滞在2日目にアウトリーチで出会い、3日目には図書館で共演し、4日目にはコンサートで共演し、ほぼ毎日と一緒に過ごし、子どもたちが日に日にアーティストになついでくれ、朗読をする声も自信も回を重ねるごとに大きくなり、コンサート時にはわくわくした様子で小走りで舞台に向かい、ステージを楽しんでくれていたように思います。

おしゃっちのSNSに「誰かに助けてって言える社会になりますように」と書かれていたことがありました。私のおんかつモチベーションとまさに同一で、これは別の被災地に伺ったことがきっかけだったのですが、小学校運動場の仮設住宅で暮らす人々と学校外のグラウンドに移動して体育の授業を受ける子どもたちとの間で言葉が交わされることはなく、まるで存在していないかのように息を潜めながら生活されている方々がいらっしゃいました。以来、小さくとも声を発することができる人とその声を聞きとれる人が増えたらいいなと思いつつおんかつに関わっています。

アーティストが全霊で表現を行うことは尊く、またそれを受け止めることも尊い。受け止めた経験があれば発することに臆する気持ちを和らげてくれるのではないか。大槌町おんかつで日に日に変化していく子どもたちとその変化を生み出すアーティストの本気を見ながら、人と人がちゃんと関わることの大切さと、アウトリーチプログラムには、人と関わる術が内包されるべきことを改めて感じさせてもらいました。

おしゃっちには一人一人の小さな声を聞き、心が追いつかなくなるような時に寄り添ってくれる人たちがいらっしゃいます。新しい大地に思いを馳せて生きる町の人々と、共に存在しているからこそ、心の置き場所を作ってくれる温かな居場所となりえているのだらうと思う。

コロナ禍における「おんかつ」—多様な実施方法の検討と、柔軟な対応力の重要性—

2021年度は前年度よりも状況が好転するかと期待されたが、コロナ禍における第5、第6波の影響は大きく、残念ながら「おんかつ」においても中止や延期を余儀なくされた。筆者が担当した秋田県羽後町と山梨県北杜市の事業に関しては、前者は中止となり（下見まで実施）、後者は現地地下見が延期となりながらも実施できた。

「おんかつ」を遂行するにあっては都道府県をまたぐ移動が伴うため、受入れ側にとってコロナ感染の懸念材料が多いことはいうまでもないが、加えてアウトリーチという形式が極めて密になりやすくインタラクティブな活動であることが、事業をさらに困難なものにしている。長期化するコロナ禍において、従来の形態で「おんかつ」を実施することはもはや不可能かもしれないと、新たなおんかつスタイルを模索する必要性を感じる1年であった。

しかしながら、2021年度はコロナ禍の2年目ということもあり、実施団体は当該地域の感染動向をみながら、状況に応じた方法を事前に想定し実施することができた。例えば、羽後町の場合は予定していた下見の時期に現地訪問ができなくなったことにより、オンライン下見に切り替えた。現地訪問よりは得られる情報は少なく、会場のスペースの感覚は映像だけでは把握しづらかったが、事業を少しでも前に進めていくという点では、オンライン下見の成果はあったといえる。初めての試みに対応して下さった担当者の黒澤さんや、下見先の小学校の皆様に感謝申し上げたい。コロナ禍から生まれたメリットとしては、従来は現地地下見の後はメールのやり取りが中心だったのが、zoomによる話し合いを複数回実施し、顔を見ながら話し合うことができたことが挙げられる。ここ数年、リモートワークの機会が多くなり、誰もがzoom等のツールに使い慣れてきたことをふまえると、今後はホール担当職員やアーティストもオンラインを活用することで、効率よく綿密に準備が進めることができよう。アウトリーチの実施方法においても、対象者が演奏者の近くで演奏を体感できない際に、演奏者の手元をビデオカメラで映すなどして補うなど工夫がなされた。アーティストから対象者へ音楽を通じて何をどのように伝えるのか、技術的な面にとどまらず、新たなアイデアの創出を期待したい。

2021年度の事業を終えて感じたことは、アウトリーチとホール公演の双方において、様々な状況を想定しAパターン、Bパターン…と複数の対応策を検討しておくことの重要性である。いつ状況が急転するかもより早めに起こりうる状況を想定し、より多くの選択肢をもって柔軟に対応することが、コロナ禍であっても一定の成果に繋がる鍵となるだろう。特にアウトリーチ活動では、アーティストとホールの担当職員が、想定される条件下で何かできるのか、どこまでミッションを達成できるのかを共有し、協働で取り組むことが、今後のアウトリーチ事業において重要であると考えている。

オンライン事業を新たな事業として捉える

2020年より突然起こったパンデミックは、デジタル対応の必要性が議論されながらも遅れがちだった音楽分野のオンライン化を急加速させ、ICTの発展により様々な手法が考案されると同時に、音質や音の遅延等の問題も改善されてきた。地域や施設の通信環境等によって状況は異なるとはいえ、オンラインでのアンサンブルや遠隔ワークショップといった事業が可能となり、地理的・物理的に劇場とつながることができなかった人々にも音楽を届けられるようになった。音楽におけるアウトリーチ活動の目的は、ホールに来ることが困難な状況にある人々や音楽に触れる機会が得られない人々に音楽を届けることだとすれば、オンラインを活用した事業も1つの手法として捉えられるのではないだろうか。生の鑑賞体験や対面でのコミュニケーションが最良であることは言うまでもなく、今後も決して変わらない。しかしながら、オンラインが悪い、不十分だという考えをもち続けるのではなく、またオンラインの活

動をライブ活動の代替事業として捉えるのではなく、新たな事業として捉える段階にきているのではないだろうか。ここで重要となるのは、通常の形式（生演奏・対面）で実施することをオンラインに移行するのではなく、生演奏とは異なる目的を設定してオンライン事業を考案することである。さらに、オンラインでの体験だけで終わらせるのではなく、最終的にはホールでの生の鑑賞体験へ繋げることを忘れてはならない。オンライン事業の捉え方を変えることにより、従来のアウトリーチ活動よりも幅広い対象者に音楽に触れる機会を提供するといった、新たな目標を達成することも可能である。また公共ホールにとっては、ステークホルダーの拡大に繋がることも期待できるであろう。

ポストコロナ社会において、持続的な公演活動およびアウトリーチ活動を展開するには、オンラインを有効活用し、対面の活動と並行して取り組むことが重要となってくると考えられる。すでに欧米諸国では、文化施設や芸術団体がコロナ対応としてのみならず社会包摂に対する一手法として、また世界へ発信するための有効な手段としてオンラインの有効活用を進めており、我々も参考にすべきであろう。オンライン事業を遂行するには、ネットワーク環境、機材等の基盤整備、著作権、契約関係等の新たな対応が必要となってくる。人的ならびに財政的な課題が多くあるなか、一朝一夕にできることではないが、公共ホールにおいて、ポストコロナを見据えた中長期的な整備計画が求められる時期にきているのではないかと考える。

自分の思いを他人と共有することはとても難しいことです。同じ音楽を聴いたり絵や景色を見ても、感じることはまるで違うこともありますし、演奏する側にとっても、同じ曲を演奏したとしても人が変われば違う表現になります。それはその曲に対してそれぞれの考えがあるからこそで、違いや独自のものが生まれるわけです。おんかつのアクティビティの場ではそれぞれ感じたことが個性で大事だと伝えることもある一方で、物事を進めるにあたって他人と共感・共有することは、とても重要になってきます。

おんかつではまず担当者の思いや狙いを掘り下げ、どのような形にしていくのかをアーティストや我々スタッフの意識の共有からスタートし、それをアクティビティやコンサートでその地域の人々にお届けするわけですから、関わる人が多いとその共有もなかなか大変なことではあります。事業担当者は企画段階で、どんな目的で、誰のために、どう変わって欲しいかなどを、地域住民の立場になって、どのようなアクティビティとコンサートにするのか考えていきます。はじめはどこかの町でやった内容を真似たり、様々な地域の事例も参考にするなど、それをベースにして考えることも一案です。ただ、その町にはその町らしさがあり、その人に当たり前のものが珍しかったり、その逆も然り。自分の町や地域に落とし込んだ時にどうしてもしっくりいかないことや、当初の企画書や思い描いていたもので走り出しても、すんなり行かずに検討しなければいけないこともあります。担当者が明確なビジョンを持って進めていくこともとても重要なことですし、一方で、それまでのプランとは異なったアプローチで取り組んだことによって、また違った一面が見えてくるのも面白いところです。担当者を中心に、アーティストや関わるスタッフがさまざまな意見を出し合いますが、同じような話をして、その人によって感じ取り方はさまざまですし、そこにも個性が出てきますので、ぜひみなさんで意識の共有をしてください。

伝えたいことをどう伝えるか、ということはなかなか難しいことですが、私個人としては、断定的ではなくこういう形はどうですか、と選択できる可能性を持てるよう接しています。人に動いてもらうためには、その人のためになることを考えるよう心がけ、押し付けるのではなく、「すごい」「楽しい」「なるほど」など、前向きに捉えられるような感情を共感できる場所を伝えていくのが近道ではないかと思っています。

2021年度も新型コロナウイルスの影響は多大でしたし、コロナによる行き所のない気持ち、不安のエネルギーを良い形に置き換えられないだろうかよく考えさせられます。

それぞれの自治体や会館での考え、方向性などがおありでしょうから、事業の実施に関してもさまざまな対応を迫られることもあります。担当者の思いや、それまで準備してきたものを考えると、延期にできればまだしも、中止とするのはなんともやるせない気持ちです。担当した日高川町から中止の知らせを受けた際に、アクティビティであればリモートでアーティストと関わりを持つことも一つの形になり得るのではないかと提案させていただきました。クラシック音楽を生で届けたいというのはもちろん第一にありますし、もちろん、設備、環境さまざまな条件がクリアできればの話になりますが、今回は担当者、アーティストともに、このような環境下でもできる音楽による交流に手応えをつかめたようです。予定していたことができないとなったときは、ただ中止にするのではなく代わりに何ができるかということも検討していただければと思います。

この事業は、一度の実施で成果が見えるものでも目標が達成できるものでもないのが難しいところです。事業を続けていくことそのものがある種の「作品」と捉えて、それも一緒に楽しんでみてはいかがでしょうか

でしょう。継続していくことによってさまざまなことに気づき、試行錯誤を続けて、その町独自のプログラムになれば嬉しいことです。担当者を中心に、アーティストやスタッフ皆さんで取り組む共同作業ですから、場づくりも大切です。互いに相手を楽しくさせようとする、またそれが楽しいと思える者同士でその場が出来上がります。周りに心を注ぐことを楽しめれば、お互いの意識の共有にもつながるのではないのでしょうか。立場がそれぞれだとしても、個人でできることは大差ないので、チームとして協力して臨んでください。

出会う人は選べませんが、関わる人は選ぶことができます。深く関わりたいと思うような方々に出会うのはとても幸運なことだと再認識しました。大館市、日高川町のおんかつに関わられた皆様に改めて感謝いたします。

コロナ禍以前と with / after コロナでの公共ホールの変化

2020年に端を発した新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、全国各地の公共ホールが多大な影響を受け続けています。この2年間で延期や中止に追い込まれたコンサートの数は計り知れず、ソーシャルディスタンスや3密の回避といったルールの対応を迫られました。そこで、今回の私の視察は「コロナ禍以前と with / after コロナでの公共ホール」というテーマで取材しました。この2年間、コロナ禍に向き合い続けてきた公共ホールで、何を考え、行動し、どう変化しているのか、耳を傾けてみたいと思います。

視察は2021年12月16日、高知市文化プラザかるぼーとが行ったアウトリーチで、アーバン・サクソフォン・カルテットによる高知市内の幼稚園児と高校の吹奏楽部員を対象とした2回のアウトリーチを見学し、その合間に公益財団法人高知市文化振興事業団の企画事業課の岡田真也さんにお話を伺いました。

開館からコロナ禍までのかるぼーとの事業

高知市文化プラザかるぼーとは2002年に開館しました。施設は大ホール（客席数1,085席）と平土間の小ホール（定員200名）、中央公民館、市民ギャラリー、横山隆一記念まんが館などの複合文化施設で、ホールだけでなく地域へのアウトリーチなどを行う自主文化事業、中央公民館事業を公益財団法人高知市文化振興事業団が行っています。開館当初から、ホールの自主文化事業では音楽、演劇、ダンス、美術など多様な分野に取り組み、集客力のある公演や、地元の文化団体の発表やホール独自の企画にも取り組んできました。

安定的に予算が確保できていた時期は、年間15本から20本の自主文化事業を行い、海外招聘のオペラなど大規模な公演に取り組んでいましたが、財政状況は徐々に厳しくなり、コロナ禍以前の自主文化事業は年間12本。事業数の減少だけでなく、個々の事業の予算規模も圧縮しながらも、ジャンルが偏らないようにバランスに配慮し、ひと月に1本程度の事業を市民に提供できるようにプログラムを編成。アウトリーチも音楽、演劇、美術などのアーティストを、年間3組から5組、地域に派遣していました。

コロナ禍の初期（2020年度上半期）の業務とコンサートの再開

2020年の2月頃から日本各地に新型コロナ感染症が拡大し、事業の中止を決定した3月から9月まで、企画事業課の岡田さんの企画制作にかかわるほとんどの業務を停止し、資料の整理、コロナ対策のガイドラインの作成、感染症対策用品の購入整備などを進めました。感染者数が減少傾向にあった2020年9月、小ホールで、世界的なドラマーの神保彰氏のコンサートで事業を再開しました。事業を担当した岡田さんは、定員の50%で用意したチケットは発売後すぐに完売し、生のコンサートを切望するお客様の期待を感じた一方で、「感染者を出してはならないというプレッシャーも相当ありました」と言います。検温、消毒、3密の回避などを徹底した当日運営に努め、観客のアンケートには「きちんと対策されていたので安心しました」という声が多かったそうです。

アウトリーチの再開と「withコロナ」のジレンマ

長期化するコロナ禍で、徐々に事業は再開しますが、財団内部の職員でも事業の再開に前向きな人もいれば慎重な人もいたそうです。そうした中でアウトリーチでは、ソーシャルディスタンスを保つために子どもたちに近づくことはできず、マスク越しでの会話で表情も読み取りにくいいため、同じ視線の高さで交流することが難しく、どうしても一方向のコミュニケーションになりがちです。「アウトリーチの醍醐味は双方向の関係だと思うんですが、それがコロナ禍だと難しいです。いろいろ工夫はするん

ですが…」という岡田さん。

2021年度の事業は市の財政も厳しいために事業予算は大幅に減額され、限られた予算の中で個々の事業はますます小粒になります。加えて、人と人の距離が密になる参加型・交流型の企画、出演者・スタッフ体制が大人数でバックステージの管理が難しい企画、海外からの招聘など、感染防止対策が困難で中止のリスクのある事業を避けることになります。「with コロナ」での自主文化事業は、結果として、観客と出演者の距離を保ち、出演者・スタッフが小規模な体制での鑑賞型の公演が中心となっています。

何を求めてアウトリーチをするのか

このような厳しい状況で、何を求めてアウトリーチをするのか、岡田さんに聞きました。幼少から大学までサッカーを続けてきた彼は、子どもの頃にプロのサッカー選手に教わった経験があり、今も心に強く残っているそうです。「当時の大人がそういう環境を作ってくれたように、今度は大人になった僕が、今の子どもたちにプロのアーティストと出会う環境を作ることで、『こういう人になりたい』と思う子どもが一人でも多く現れてほしいです」と岡田さん。「それは、コロナ以前から変わりません」。

今回のレポートでは、いまだにコロナ禍の出口が見えない中で、高知市文化プラザかるぼーとを事例として様々な変化を振り返りました。もちろんこれは一つの事例です。一つひとつの公共ホール、一人ひとりのホールのスタッフが、with / after コロナでの公共ホールのあり方を考えるきっかけにしていきたいと思えます。

第4部
令和元・3年度
公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

1 事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、公共ホールの活性化と地域の音楽分野における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホール職員等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした身近で親しみのあるクラシック音楽の公演事業及び地域交流プログラムを実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

- ① 対象団体（研修事業、総括公演プログラム事業）：（一財）長野県文化振興事業団
- ② 公演実施団体（市町村公演事業）：松川村、安曇野市、飯山市、伊那市、筑北村、茅野市

(2) 事業内容

対象団体は事業を2ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア) 研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象としてアウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ) 研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、公演実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ) アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員及び演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として4日間の連続した日程で次の事業を実施する。

ア) 地域交流プログラム

学校や福祉施設等でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業を、原則として6回（1日につき2回・3日間）実施する。

イ) コンサート

公共ホール等において有料のクラシック音楽のコンサートを実施する。

3 事業実施に対する支援

(1) チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

(3) 講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

① 演奏家派遣経費

- ・ 事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
- ・ 派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
- ・ 派遣に係る損害保険料

② 研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の2年間で50万円を限度として負担する。

③ アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④ 市町村公演事業負担金

公演実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、1団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、1団体につき5万円を限度として負担する。

5 派遣アーティスト及び派遣コーディネーター

(1) 派遣アーティスト

① ピアノトリオ（ル・レーヴピアノ三重奏団）

守重結加（Pf）、三宅音葉（Vn）、有梨瑳理（Vc）

② サクソフォン四重奏（Modétro Saxophone Ensemble）

飯塚恭平（S.sax）、西田剛（A.sax）、織田和優（T.sax）、歌頭諒（B.sax）

※ガラコンサート：西田剛（S.sax）、山本直哉（A.sax）、織田和優（T.sax）、金山佑真（B.sax）

③ サクソフォン四重奏（Quatuor Élan）

酒井希（S.sax）、磯貝充希（A.sax）、安泰旭（T.sax）、竹下眞理子（B.sax）

※ガラコンサート：酒井希（S.sax）、磯貝充希（A.sax）、井上ハルカ（T.sax）、竹下眞理子（B.sax）

(2) チーフコーディネーター

山本若子（（有）N.A.T取締役）

(3) コーディネーター

唐谷裕子（オペラ演出家）

山本若子（（有）N.A.T取締役）

楠瀬寿賀子（音楽企画コーディネーター）

(4) アシスタントコーディネーター

新崎洋実（ピアニスト、豊中市立文化芸術センター第1期レジデントアーティスト）

大塚貴雄（（有）N.A.T）

金丸寛（マリimba・打楽器奏者）

6 事業概要

(1) 研修事業

①研修プログラムⅠ（アウトリーチ・セミナー）

日 時：令和元年7月24日（水）13：30～17：10

会 場：キッセイ文化ホール リハーサル室

対象者：長野県内の市町村文化担当者、公共ホール職員（参加者25名）

内 容：アウトリーチに関する知識や理解を深めてもらうため、講演および若手演奏家による模擬アウトリーチを実施した。

時 間	内 容
13：30～13：40	主催・共催あいさつ
13：40～14：40	ワークショップ 講師：田上豊（劇作家、演出家、田上バル主宰、富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督）
14：50～15：35	模擬アウトリーチ 実演：トリオ・リラ（ピアノトリオ）
15：45～17：00	トークセッション 山本若子、田上豊、トリオ・リラ
17：00～17：10	閉会のあいさつ

②研修プログラムⅡ（全体研修会）

日 時：令和3年4月28日（水）13：30～17：00

会 場：オンライン（キッセイ文化ホール 第1会議室、地域創造 会議室ほか）

対象者：アーティスト、市町村公演事業担当者（参加者30名）

内 容：アーティストおよび市町村公演の担当者を対象者に、事業全体に関する説明を実施した。
また、市町村ごとに個別打合せを行い、市町村公演に向けた準備を行った。

時 間	内 容
13：30～13：40	主催・共催あいさつ
13：40～13：50	参加者紹介
13：50～14：35	講義「アウトリーチ・フォーラム事業が目指すもの～プログラム作りの視点から～」 講師：山本若子、楠瀬寿賀子
14：50～15：10	事業説明・質疑応答
15：10～17：00	個別打合せ

③アウトリーチ研修

日 程：令和3年6月25日（金）～6月30日（水）

会 場：キッセイ文化ホールほか

対象者：ル・レーヴピアノ三重奏団、Modétro Saxophone Ensemble、Quatuor Élan

内 容：アーティストを対象とした、アウトリーチプログラム作りの研修を実施した。

日 程	内 容
6月25日（金）	開講式、個別研修
6月26日（土）	個別研修
6月27日（日）	個別研修
6月28日（月）	個別研修、ランスルー

6月29日(火)	アウトリーチ 会場：松本市立開智小学校 ① ル・レーヴピアノ三重奏団 9：40～10：25(4年生・31名) ② Modétro Saxophone Ensemble 11：40～12：25(4年生・33名) ③ Quatuor Élan 13：55～14：40(4年生・35名)
	15：30～16：30 チーム別ミーティング
	16：30～18：00 全体ミーティング
	18：00～21：30 個別研修
6月30日(水)	アウトリーチ 会場：松本市立明善小学校 ル・レーヴピアノ三重奏団 ① 9：35～10：20(4年生・37名) ② 11：35～12：20(4年生・37名)
	アウトリーチ 会場：松本市立奈川小・中学校 Modétro Saxophone Ensemble ① 9：40～10：25(小学生・13名) ② 11：45～12：35(中学生・7名)
	アウトリーチ 会場：松本市立開智小学校 Quatuor Élan ① 9：20～10：05(6年生・56名) ② 11：20～12：05(6年生・56名)
	15：00～15：50 チーム別ミーティング
	15：50～16：10 閉講式

(2) 市町村公演事業

【ル・レーヴピアノ三重奏団】

① 松川村公演

日 程：令和3年10月13日(水)～10月16日(土)

主 催：松川村

日 程	内 容
アウトリーチ	
10月13日(水)	会場：松川村立松川中学校 ① 10：45～11：35(2年生・26名) ② 11：45～12：35(2年生・25名)
10月14日(木)	会場：松川村立松川中学校 ③ 10：45～11：35(2年生・26名)
	会場：松川村立松川小学校 ④ 14：55～15：40(6年生・25名)
10月15日(金)	会場：松川村立松川小学校 ⑤ 14：05～14：50(6年生・25名) ⑥ 14：55～15：40(6年生・25名)
コンサート	
10月16日(土)	会場：松川村多目的交流センターすずの音ホール 入場者：107名

② 茅野市公演

日 程：令和4年1月12日（水）～ 1月15日（土）

主 催：(株)地域文化創造

日 程	内 容	
アウトリーチ		
1月12日（水）	会場：茅野市立北山小学校 ① 10：30～11：10（6年生・23名）	※左記のとおり実施予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりすべて中止。代替として茅野市民館にてアウトリーチプログラムをビデオ収録し、DVDを配布。
	会場：茅野市立米沢小学校 ② 14：50～15：35（6年生・39名）	
1月13日（木）	会場：茅野市立金沢小学校 ③ 10：45～11：30（5・6年生・36名）	
	会場：茅野市立泉野小学校 ④ 15：00～15：45（4・6年生・20名）	
1月14日（金）	会場：茅野市立長峰中学校 ⑤ 11：10～12：00（特別支援級・24名）	
	会場：茅野市立豊平小学校 ⑥ 14：55～15：40（6年生・35名）	
コンサート		
1月15日（土）	会場：茅野市民館コンサートホール 入場者：82名	

【Modétro Saxophone Ensemble】

① 安曇野市公演

日 程：令和3年10月27日（水）～ 10月30日（土）

主 催：安曇野市教育委員会

日 程	内 容		
アウトリーチ			
10月27日（水）	会場：安曇野市立堀金小学校 ① 11：40～12：25（6年生・29名） ② 13：30～14：15（5年生・25名）		
	会場：安曇野市立堀金小学校 ③ 9：40～10：25（6年生・31名） ④ 11：40～12：25（5年生・26名） ⑤ 13：55～14：40（6年生・29名）		
10月29日（金）	会場：安曇野市立堀金小学校 ⑥ 9：40～10：25（5年生・25名）		
コンサート			
10月30日（土）	会場：安曇野市穂高交流学习センター「みらい」多目的交流ホール 入場者：82名		

② 筑北村公演

日 程：令和3年12月15日（水）～ 12月18日（土）

主 催：筑北村教育委員会

日 程	内 容
アウトリーチ	
12月15日（水）	会場：筑北村立筑北小学校 ① 11：35～12：20（3年生・28名） ② 13：40～14：25（1年生・14名）
12月16日（木）	会場：筑北村立筑北小学校 ③ 10：45～11：30（2年生・21名） ④ 13：40～14：25（5年生・28名）
12月17日（金）	会場：筑北村立筑北小学校 ⑤ 10：45～11：30（6年生・20名） ⑥ 13：40～14：25（4年生・24名）
コンサート	
12月18日（土）	会場：本城農村環境改善センター多目的ホール 入場者：74名

【Quatuor Élan】

① 飯山市公演

日 程：令和3年11月10日（水）～ 11月13日（土）

主 催：飯山市、飯山市教育委員会

日 程	内 容
アウトリーチ	
11月10日（水）	会場：飯山市美術館 ① 16：30～17：20（飯山市文化振興部・19名）
11月11日（木）	会場：ひなたやまロッジ ② 11：00～11：50（母親グループ・19名）
	会場：飯山市文化交流館なちゅら ③ 14：00～14：50（フジすまいるファーム飯山（障害福祉サービス事業所）・20名）
11月12日（金）	会場：ホテルほていやホール ④ 12：00～12：30（飯山商工会議所女性会・25名）
コンサート	
11月13日（土）	会場：飯山市文化交流館なちゅら大ホール 入場者：102名

② 伊那市公演

日 程：令和3年11月24日（水）～ 11月27日（土）

主 催：伊那市

日 程	内 容
アウトリーチ	
11月24日（水）	会場：伊那市立西春近南小学校 ① 10：55～11：40（6年生・24名）
	会場：伊那市立東春近小学校 ② 14：20～15：05（5年生・51名）

11月25日 (木)	会場：伊那市立伊那北小学校 ③ 10：50～11：35 (5年生・43名)
	会場：伊那市立新山小学校 ④ 14：00～14：45 (全校・48名)
11月26日 (金)	会場：伊那市立長谷小学校 ⑤ 10：50～11：35 (4・5年生・18名)
	会場：伊那市立高遠小学校 ⑥ 14：05～14：50 (5年生・34名)
コンサート	
11月27日 (土)	会場：ニシザワいなっせホール 入場者：88名

(3) 総括公演プログラム事業 (ガラコンサート)

日 時：令和4年2月26日 (土)

会 場：キッセイ文化ホール 中ホール

入場者：186名



アウトリーチ研修



市町村公演事業 (ル・レーヴピアノ三重奏団、松川村立松川小学校)



市町村公演事業 (Modétro Saxophone Ensemble、安曇野市立堀金小学校)



市町村公演事業 (Quatuor Élan、飯山市美術館)



総括公演プログラム (ガラコンサート)

ル・レーヴピアノ三重奏団（ピアノトリオ）

Le Rêve（ル・レーヴ）とはフランス語で「ひとつの夢」を意味します。私たちル・レーヴピアノ三重奏団は、子供の頃に、音楽家という大きな夢を与えられ、沢山の夢の中から音楽の道を選びました。音楽は、誰もが心の奥に宿している好奇心や憧れを刺激するような、大きなエネルギーと可能性を秘めています。皆さんに、アウトリーチを通じて、「ひとつの夢」を提供できるグループでありたいと願っています。2020年にトリオ結成。2021年8月、ル・レーヴピアノ三重奏団として初のリサイタルを開催し、モーツァルト、ラヴェルの他、作曲家による委嘱作品を演奏。

○守重 結加（もりしげ ゆか）ーピアニスト

東京都出身。桐朋学園大学音楽学部を卒業し、ヤマハ音楽振興会留学奨学生として渡独。ベルリン芸術大学修士課程ソリスト科、同大学修士課程室内楽科を修了。2018年にベルリンフィルハーモニー・大ホールにパデレフスキのピアノ協奏曲のソリストとしてデビューし、以降もソリスト・室内楽奏者として国内外で幅広く活動している。2019年エイヴェレ国際音楽祭（エストニア）に招聘され、ソロリサイタルを開催。エドヴィン・フィッシャー国際ピアノアカデミー第1位。ブゾーニ国際ピアノコンクールスカラシップ受賞など、これまで数多くのコンクールで受賞。クラリネット奏者 東紗衣とのCD「Klangfarben～響きの彩～」が全国CDショップで好評発売中。また、2022年2月23日にデビュー・アルバム「シューベルト 即興曲集D899&ピアノ・ソナタ第21番D960」がオクタヴィア・レコードよりリリース。

○三宅 音菜（みやけ ねな）ーヴァイオリン

4歳よりヴァイオリンを始める。第27回子供のためのヴァイオリンコンクール金賞受賞。第63回全日本学生音楽コンクール名古屋大会第3位。市川市文化振興財団第29回新人演奏家コンクール優秀賞。第20回ブルクハルト国際音楽コンクール第1位。2016年、フランスで行われたMusicAlp夏季国際アカデミーに参加。R.Daugareil氏のレッスンを受講、選抜コンサートに出演。これまでに、服部芳子、漆原朝子、H.Zack、大谷康子、海野義雄の各氏に師事。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学を卒業。また、東京音楽大学大学院修士課程を準特別招待生として卒業。現在、プロオーケストラのエキストラ出演や室内楽など、幅広く演奏活動を行なっている。

○有梨 瑳理（あり さり）ーチェロ

愛知県出身。4歳よりスズキメソッドでチェロを始める。第16回KOBEL国際音楽コンクール弦楽器部門最優秀賞並びに兵庫県教育長賞、タカハシ・パール賞受賞。室内楽では、2010年第10回大阪国際音楽コンクールアンサンブル部門第1位並びに審査委員長賞受賞。第6回ルーマニア国際音楽コンクールアンサンブル部門最高位。これまでにチェロを中島顕、林良一、花崎薫、河野文昭の各氏に、室内楽を岡山潔、松原勝也、市坪俊彦、山崎伸子、山本正治、東誠三の各氏に師事。東京藝術大学音楽学部附属高校を経て、東京藝術大学音楽学部卒業。2014年から2019年まで兵庫芸術文化センター管弦楽団に在団。現在プロオーケストラのエキストラ出演や様々な演奏会出演などフリーで活動中。

Modétro Saxophone Ensemble (サクソフォン四重奏)

2021年結成。グループ名の「Modétro」は、「modern (現代風)」と「rétro (古風)」を合わせた造語である。バロックから現代を網羅し、その魅力をサクソフォーンで伝えたい、という思いを込めている。アウトリーチでは優れたコミュニケーション能力を発揮して子どもたちに音楽の魅力を伝え、コンサートでは多岐にわたるレパートリーと小気味良いお話しで会場を沸かせる、聴衆と共に時空を遊ぶサクソフォーン・アンサンブルである。2021年ファーストアルバム「Realize」をリリース。

○飯塚 恭平 (いづか きょうへい) - ソプラノサクソフォーン

神奈川県座間市出身。中央大学理工学部を経て、尚美ミュージックカレッジ専門学校を卒業。同校コンセルヴァトアールディプロマ科に進学。第27回日本クラシック音楽コンクール一般の部3位(最高位)。第4回Kサクソフォーンコンクール特別優秀賞受賞。2017年ヤマハ管楽器新人演奏会第21回木管楽器部門に出演。サクソフォーンを大和田雅洋、原博巳、田村真寛、三宅祐人の各氏に師事。室内楽を中村均一氏に師事。Philippe Geiss、Nikita Zimin各氏のマスタークラスを受講。

○西田 剛 (にしだ ごう) - アルトサクソフォーン

長野県長野市出身。長野県小諸高校音楽科、国立音楽大学卒業。ソリストとして川瀬賢太郎指揮、名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演。オーケストラ内のサクソフォーン奏者として東京フィルハーモニー交響楽団と共演を重ねる。プラスエンターテイメント「ワンピース音宴」イーストブルー編に出演。またメンバーとしてFNSうたの夏祭り、めざましクラシックスに出演。原作1000話記念企画「ワンピースおとまつり」に出演。これまでにサクソフォーンを藤澤聡子、林田和之、新井靖志、小山弦太郎、雲井雅人の各氏に、室内楽を下地啓二氏に師事。

○織田 和優 (おだ かずまさ) - テナーサクソフォーン

茨城県つくば市出身。茨城県立竹園高等学校卒業。昭和音楽大学管弦打楽器科サクソフォーン専攻演奏家コース卒業。昭和音楽大学専攻科卒業。同侪会主催新人演奏会に出演。第9回サンハート・アンサンブル・オーディション優秀賞受賞。ラ・フォル・ジュルネ TOKYOをはじめ様々なコンサートやかわさきFMラジオなどメディアへも出演。サクソフォーンを田村哲、富岡和男、有村純親、榮村正吾の各氏に、室内楽を有村純親、榮村正吾、松原孝政、福本信太郎の各氏に師事。ジェローム・ララン、ミーハ・ロギーナ各氏のマスタークラスを受講。

○歌頭 諒 (かとう りょう) - バリトンサクソフォーン

栃木県真岡市出身。昭和音楽大学卒業。第32回栃木県学生音楽コンクール第2位。第30回江戸川区新人演奏会オーディション合格。第9回サンハート・アンサンブル・オーディション優秀賞受賞。佐渡裕監修「富士山河口湖音楽祭」に出演。SAXIDEAとして、2019年1月に『reborn』をN.A.Tからリリースし、音楽雑誌『音楽現代』の推薦盤に選ばれる。サクソフォーンを宮本剣一、島田和音、武藤賢一郎の各氏に師事。SAXIDEA、Nomad Saxophone Quartetの各メンバー。若手男性サクソフォーン奏者で構成される東京サクソフォーンオーケストラ団長。

以下2名はガラコンサートのみ代奏として出演

○山本 直哉（やまもと なおや）－アルトサクソフォン－

長野県立小諸高等学校音楽科、東京藝術大学で学び、高校在学中に第8回くらしきジュニアサクソフォンコンクール2位受賞。長野県新人演奏会に出演。第9回サンハート・アンサンブル・オーディション室内楽の部で優秀賞受賞。現在は関東、長野県を中心に活動を行っている。

これまでにサクソフォンを小山弦太郎、大城正司、林田祐和、須川展也、室内楽を有村純親、林田祐和の各氏に師事。アンサンブル ノワイエメンバー。東京サクソフォンオーケストラ副団長。ヒオキ楽器上田店サクソフォンコース、山野楽器サクソフォン講師。

○金山 佑真（かなやま ゆうま）－バリトンサクソフォン－

千葉県鎌ヶ谷市出身。上野学園大学演奏家コース卒業。上野学園大学卒業演奏会出演。ソリストとして上野学園大学管弦楽団と共演。サクソフォン新人演奏会、読売新人演奏会、ヤマハ新人演奏会に出演。東京国際芸術協会新人演奏会オーディションに合格。サクソフォンを彦坂真一郎、松原孝政、長澤範和の各氏に師事。現在首都圏を中心に活動を行い、千葉県でサクソフォン教室を主催。Vario Saxophone Quartetto、東京サクソフォンオーケストラ各メンバー。

Quatuor Élan (サクソフォン四重奏)

2018年にメンバー全員が留学から帰国後、Impetus Saxophone Quartetとしてカルテットを結成。日本全国でコンサートツアーを行い、2019年にはN.A.T社からファーストアルバム「Prélude」を発売した。2020年にQuatuor Élanに改名。メンバー全員が同時期にフランスで学び、世界サクソフォンフェスティバル等の国内外でのプロジェクトや音楽祭に参加し、他の多くの楽器との共演も積極的に行い、次世代の新たなサクソフォンの更なる可能性を追求している。

○酒井 希 (さかい のぞみ) - ソプラノサクソフォン

神戸市出身。相愛大学を特別奨学生として卒業。同年に渡仏し、ヴェルサイユ地方音楽院、ブリュッセル王立音楽院修士課程を修了。在学中、ベルギー政府奨学生制度にてオランダ・アムステルダム音楽院交換留学生として派遣される。2015年秋に日本へ帰国。第10回コスマ管楽器コンクール第1位、兵庫県知事賞受賞。第2回チボリジュニアサクソフォンコンクール第1位。第7回ノヴァゴリッツァサクソフォン国際コンクールファイナリスト。インペトゥス・サクソフォンアンサンブルのソプラノ奏者。現在、日本各地で演奏活動をしながら、後進の指導にも力を入れている。

○磯貝 充希 (いそがい みき) - アルトサクソフォン

愛知県出身。名古屋音楽大学卒業。大学卒業後、渡仏。オルネー・ス・ボア音楽院最高課程、ヴェルサイユ地方音楽院最高課程を修了。第1回ディルソフフロレンシオ国際コンクール第1位、レオポルドベラン国際コンクール第1位。サクソフォンを亀井明良、小串俊寿、ジェローム・ララン、ヴァンソン・ダビッドの各氏に師事。現在は、愛知県を拠点に日本各地で演奏活動を行いながら、サクソフォンの指導にも力を入れている。インペトゥス・サクソフォン・アンサンブルのアルトサクソフォン奏者をはじめ、ユニータデラサククス、音楽クラコ座の各メンバー。名古屋音楽大学附属音楽アカデミー講師。

○安 泰旭 (あん てう) - テナーサクソフォン

大阪市出身。相愛大学音楽学部管打楽器専攻を首席で卒業後、リヨン地方音楽院を経てブリュッセル王立音楽院修士課程を修了。その後ウィーン国立音楽大学室内楽科研究科課程に入学し修了。現在ドイツ・ベルリンに拠点を置き、フリーランスのソリスト・室内楽奏者として活動し、オーケストラの客演なども行う傍ら、テクノやコンテンポラリーダンサーとのコラボレーションを重ね、実験的音楽の分野にも力を入れつつ、新たなクラシカルサクソフォンの可能性の幅を広げている。インペトゥス・サクソフォン・アンサンブルのアルトサクソフォン奏者。

○竹下 眞理子 (たけした まりこ) - バリトンサクソフォン

富山県出身。洗足学園音楽大学卒業。卒業と同年に渡仏。サンモール音楽院をサクソフォン科、室内楽科、共に最高課程修了。ヴェルサイユ音楽院をサクソフォン科、室内楽科、共に最高課程修了。在学中フランスをはじめ、ヨーロッパ各国でサクソフォンアンサンブル、室内楽で演奏を行う。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2018第2位。現在、ソロやアンサンブルで国内外で勢力的に演奏活動を行う傍ら、サクソフォンや室内楽、吹奏楽の指導も行っている。インペトゥス・サクソフォン・アンサンブルのバリトンサクソフォン奏者。

以下1名はガラコンサートのみ代奏として出演

○井上 ハルカ（いのうえ はるか）ーテナーサクソフォンー

愛媛県出身。ESA音楽学院、リヨン地方音楽院、パリ国立高等音楽院を修了。ブローニュ・ビヤンクール現代音楽コンクール2014にて審査員特別賞（部門最高位）、現代音楽演奏コンクール《競楽XII》にて聴衆賞を受賞。現在は関西を拠点に後進の指導と、現代音楽や非オリジナル作品を通じて新たなサクソフォンのレパートリーの開拓を行なっている。インペトゥス・サクソフォン・アンサンブルのソプラノサクソフォン奏者。アルバム『SONATE』レコード芸術準特選盤。配信アルバム『Rachmaninov』発売中。ESA音楽学院専門学校非常勤講師。

1 実施目的

平成30年3月に長野県が策定した『長野県文化芸術振興計画』及び当事業団の『基本方針』では「文化施設によるアウトリーチ活動の推進、充実」「市町村文化施設との連携」が掲げられ、アウトリーチ事業の重要性が示されている。これを踏まえ、当事業団が指定管理を受けて管理運営を行う文化施設においても、アウトリーチ事業に積極的に取り組むことを計画していることから、アウトリーチ事業を基本から学び実践し今後活かしていくために、この事業を実施した。

2 各年度の実施状況

(1) 令和元年度

県内の公共ホール事業担当者、県・市町村文化行政担当者、教育関係者等を対象とした「アウトリーチセミナー」を実施した。演出家の田上豊氏によるワークショップと鹿児島セッションでの派遣アーティスト「トリオ・リラ」による実演、山本チーフコーディネーターも加わったトークセッションを行い、アウトリーチの意義や可能性を学び、理解を深めた。参加者同士のコミュニケーションがとれ、実際にアウトリーチを体験できる内容は、参加者から「より身近にアウトリーチに興味と関心を持つことができた。」と好評であった。また、県内のホール担当者、事業団職員らの交流・情報交換の場にもなり、そのような機会を提供できたことは有意義であった。

(2) 令和3年度

新型コロナウイルス感染症拡大により事業を延期したことから、令和3年度に2年目の事業を実施した。1年延期となったが、引き続き6市村が参加をしてくださったことは大変有り難かった。

4月にフォーラム事業に参加する6市村（伊那市、飯山市、茅野市、安曇野市、筑北村、松川村）の担当者を対象とした研修会をオンラインで開催した。市村担当者はキッセイ文化ホールに来館、コーディネーター、アーティストは各所から参加する方法で実施した。オンライン開催は不安があったが、地域創造担当者の指導により大きなトラブルなく進めることができ、山本、楠瀬コーディネーターの講義と個別打ち合わせにより、本事業がより具体的になり理解を深めることができた。

6月末、今回の事業に関わる全ての方々が一室に会し、アウトリーチ研修を実施した。参加アーティスト1組が変更になる事態となったが、6日間にわたる研修会では、ハードなスケジュールのなか、コーディネーター、アーティストが子どもたちに届けるプログラム作りに取り組み、松本市内の小中学校でアウトリーチを実施した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため事前の下見ができない等、万全の体制とは言えない状況であったが、学校からは歓迎を受け大変喜んでいただけた。3組のアーティストがつくったプログラムはそれぞれの個性が発揮されており、その三者三様の制作過程も垣間見ることができ貴重な時間となった。

10月からは6市村での事業がスタートした。コロナ禍のなかでの実施は、先が見通せず、その都度判断をしていかねばならず、各市村担当者は本当にご苦労をされたと思う。飯山市、茅野市では学校でのアウトリーチが実施できない状況となったが、飯山市は一般者へのアウトリーチ、茅野市は映像を制作し学校へ配布するという対応をされ、無事6市村で事業を実施することができた。各市村担当者をはじめアーティスト、コーディネーター全ての関係者が状況に応じ最善の対応をされていることに敬服するとともに、そこに強い絆がうまれているのを感じた。滞在中の話題も盛り込まれた演奏会は、会場があたたかい雰囲気となり、5日間の滞在を伴う当事業だからこそ作ることができるものだと実感した。

2月に当事業の総括となるガラコンサートをキッセイ文化ホールで実施した。長野県にまん延防止等

重点措置が適用されているなか、感染症対策を講じての開催となった。新型コロナの影響で3名のアーティストが出演できなくなり大変残念ではあったが、コンサートの演出等に工夫が凝らされ、演奏もクオリティが高く、アンケートでも9割近くの方から満足の評価をいただくことができた。市村担当者も来場くださり、アーティストたちとの再会の場にもなる、集大成にふさわしいコンサートとなった。

3 成果

漠然としていたアウトリーチに対し前向きに取り組む自信がついた。アーティスト、コーディネーター、県内市町村、地域創造等の多くの方々と関わりひとつの事業を作る、当館独自での事業では得られない貴重な経験ができた。市町村と繋がることで各地域の文化芸術活動の状況を知ることができたことは、今後、当館の事業を進めるうえで活かせるものとなった。

4 課題

この経験が無駄にせず、継続してアウトリーチ事業ができる仕組みを作ることの必要性を感じた。まずは自身のホールで取り組むことを目指したい。長野県内の各地域によってアウトリーチ、演奏会に触れる機会に差があるのが現状である。県立文化施設としての役割を明確にし、各地域の状況を踏まえ、地域差がなく、アウトリーチ、演奏会を経験できる環境を作る方法を考えていきたい。

チーフコーディネーターレポート 山本 若子（(有) N.A.T取締役）

アウトリーチフォーラム事業は2004年度に立ち上げられました。2005年「沖縄行く？」の誘い文句は私には魅力的すぎる一言であり、そこからフォーラム事業との関わりが始まりました。

この報告書を書くにあたり、沖縄セッション以降どれだけのセッションに関わったのだろうかと資料を繰ると10箇所、それら全てのセッションの記憶が自分でも驚くほどに鮮明に残っています。市町村の実施団体のみなさん、アーティスト、コーディネーターそれぞれの立場にちょこまかと関われるアシスタントが私にとって醍醐味でした。長野セッションではチーフコーディネーターとして関わり、このアシスタント業に通じる全方位に俯瞰でアプローチできたこと、そしてこれまでになかった県のお立場を身近に見せていただいたことが貴重な経験となりました。

キャンプではアーティストとコーディネーターが時間をかけて楽曲が持つ要素や言葉が子どもたちにもたらす効果などの具体的な検討をし、音楽観や人生観にまで踏み込んでガブリ四つでアウトリーチプログラムを作りあげます。そしてできあがったプログラムを子どもたちに届けることを喜びとし、共に公演を作り上げてくださる実施団体のみなさま。両者にチームとしての一体感が醸成されるのはごく自然のことであり、これまたフォーラムの醍醐味です。

一方、その輪の中にどっぷりと浸るのではなく少し離れたところから見守ってくださっていたのが長野県文化振興事業団のみなさまであり、市村それぞれの成果を感じてくださったことと思います。

長野セッションでは、北信の飯山市、中信の松川村、筑北村、安曇野市、そして南信の伊那市、茅野市と、広域にわたりご参加いただきました。まちの規模や課題はそれぞれながら、今回の場合は共通する課題「コロナ対策」がありました。各自自治体におけるガイドラインは制定されている上ではありますが、他の実施団体がどのような方針で進めるのかはお互いに知りたいところであったと思われます。このような状況の中、小市さんが動いてくださりフォーラム事業におけるアウトリーチとコンサートの扱い（アウトリーチ中止、コンサートのみ開催は可能か？など）、会場の変更（アウトリーチを教室ではなく体育館で行うことは可能か？など）、またそれらに関する判断の期限などを取りまとめ情報共有くださったことは、各市村の皆様において参考材料となったのではないのでしょうか。

市町村公演が始まると、県としてのお立場はさらに見守りの色が濃くなりますが、現場で手が足りない場合にはずっとアシストに入り、公演を陰で支えてくださっていました。

市町村公演を見守るもう一方で、この事業の主催としてどうすればガラコンが集大成となるのか、そして文化度が非常に高い松本市に存在する県立ホールとして求められるものとは？ということに苦慮されていました。

コーディネーターはアーティストの中にあるものに耳をすましてプログラムに落とし込んでいきます。それと同様に小市さんはじめ県の財団の皆さんも、市町村の声が上がってこそ動き出せるのかもしれない。フォーラムでは県から市町村の皆さんへの働きかけでありましたが、アウトリーチにおいて子どもたちに対して何をもちたのか、もたらすべきなのか、そしてそれが将来どんな作用をもたらすのか、また地域に思いを馳せるアーティストの演奏とトークがどれほどお客様に寄り添ったコンサートとなるのか。このことを共有できている県と市村とが、この事業を機会に互いに連携をとりながら次なる企てを立てていただければ、これ以上の喜びはありません。

最後に...長野県文化振興事業団の皆様、長期に渡り継続してアウトリーチフォーラム事業を遂行くださり有難うございました。また、1年の延期後も変わらずこの事業にご参加くださった実施団体の皆様、アーティストの皆様、コーディネーターをお引き受けくださった楠瀬さん、唐谷さん、アシスタントの大塚さん、金丸さん、新崎さん、そしてこの事業に関わってくださった皆様、おかげさまで全プログラムを終了することができました。心より御礼申し上げます。有難うございました。

私が担当いたしましたル・レーヴピアノ三重奏団は元々予定されていた演奏者から代表以外の2人が入れ替わり、またコーディネーターも入れ替わり、全員が全員の様子を伺っていた感が研修に先立って行ったZoom会議や6月の研修が始まった当初感じておりました。日常のたわいもない話し、練習を開始する・終える、また食事のタイミング等は足並みが揃っているのですが、どこかよそよそしい雰囲気もあり、奏でられる音楽にも影響が出ている様子が見られていました。

【上手だが、本人たちの持つ本来の力や魅力が発揮されていない】このような演奏は子どもたちには直ぐに伝わり見抜かれ、音楽が与えてくれる夢（ル・レーヴメンバーの名前の由来）を伝える事が出来ないと思い、この関係性をこの研修期間中に打開しなくてはならないと考えておりました。

ここでコーディネーターから見ると、ル・レーヴメンバーのキャラクターを書き出したいと思います。まずリーダーである守重氏は、こよなく音楽を愛し、ピアノを愛し、人を愛し、人に優しく、自分に厳しい人格の持ち主で、この活動に並々ならぬ思いを持っている事がひしひしと伝わって来て、自分自身の意見や考えを提示しながらも入れ替わった2人の意見も尊重しながら研修を進めていました。三宅氏は一番若手でありながら、音楽表現に対する考えや意見をしっかり持っており、音楽を作り上げる中でじっくり来ない事は妥協せずはっきりと口に出して形にしていくタイプ。有梨氏は二人から発される意見を丁寧を受け止め、またここぞと言う時にはしっかりと意見を述べると言うタイプ、文字通り3者3様のチームでした。

その3名が研修内でテーマを掲げ、コーディネーター・アシスタントコーディネーターを交えて初めてプログラミングしたものは、私もアシスタントコーディネーターも「明らかに時間が余り過ぎるのではないかと判断したものでした。遠巻きに「時間が余っているのでは…」と言っても、改善が見られなかったため、これは一度、公開稽古の前に自主的に通し稽古をしようと計画いたしました。ここで有難かったのは、地域創造の方々やチーフコーディネーターが参加して下さった事です。考えていたMCや演奏内容（構成）では時間が足りなかったこと、予想していた反応がなく戸惑い考えていた内容通りに進められなかった事を痛感し、考え直す良いきっかけとなりました。その後に行った反省会では、アウトリーチ活動の捉え方から始まり、本人たちの心の中をさらけ出し合う事が出来て一気に親密さが増し、音色もクオリティーも格段と変わりました。私はここが一つの分岐点だったと確信しております。全ての構成を見直し、翌日の公開稽古では自信に満ち溢れた演奏をし、そのままアウトリーチへ入っていく事が出来たと思います。

彼女たちは丁度中間時期にあたる8月に自主的に演奏会を企画しておりました。この演奏会ではコロナ禍で広まりつつある配信にも積極的に取り組み、まさかこの配信の経験が1月のアウトリーチの際に役立つとは思っていませんでした…。

10月の松川村では8月のコンサートが良い雰囲気で進められていたので注意しておりましたが、6月の緊張に満ちた演奏とは打って変わり、奏者全員が自分の持っている能力内の演奏をし始め、子どもたちの視線が外の景色を見たり、伸びをする子がいたり集中力を欠いている様子が多くみられました。半分の行程を終えたその日、かなり疲れていた彼女たちに「今日の演奏はあまり良くなかった」と切り出し、追い詰めてしまいました。松川村の担当であった太田氏始めずの音ホールの皆様に心配とご迷惑をお掛けしてしまった事はコーディネーターの立場として反省すべき点と捉えております。しかしな

がら彼女たちは真摯に言葉を受け止めてくれ、翌日には心を整えて生き生きとした演奏を子どもたちの前で奏で、その時の空気感が良かった事が彼女たちの自信に繋がり、その流れでコンサートを行う事が出来ました。アンコールで法被を貸して頂き演奏した安曇節は絶品の演奏でした。太田氏がコンサート後に流された美しい涙は、演奏家冥利に尽きると思います。

アウトリーチ活動の素晴らしさを体感し1月も是非に！と願っておりましたが、2022年の年明け頃からコロナ感染者数が急増し、茅野市へ向かう列車に乗って数分後「全ての学校での実施が不可能となった」と一報が入りました。一瞬呆然としましたが次の瞬間には「配信は出来ないものか提案してみよう」と気持ちを切り替えておりましたが、この考えに直ぐ至ったのも彼女たちが昨年8月に配信を行っている事が大きく作用しました。茅野市に入り、何とも言えない重い空気で打ち合わせが始まりましたが「子どもたちにル・レーヴの音楽を届けたい」とアウトリーチ活動を是非とも実施したいという気持ちがル・レーヴメンバー始め、劇場側の関係者全員にあり「配信は難しいがDVDを作成して配布しましょう」という提案を頂きました。いきなりの方向転換となりましたが、重い空気も一掃され各セクションが水を得た魚のように敏速に動き出しました。この感動は今も心にあります。ル・レーヴメンバーはDVD用にMCを構成し直し、DVD用の練習、リハーサル、撮影、そして最終日用のコンサートの練習と非常に充実した時間を送っておりました。茅野市の担当であった山内氏はじめ茅野市民館のスタッフの皆様の手厚いサポートに感謝いたします。

この活動が締めくくりとなるガラコンサートでは、演奏家として目の見張るほどの成長をし、自信を持って人前で演奏していたのではないかと感じております。

末筆になりますが、コロナ禍の中で長野セッションの実施の決断を頂いた長野県文化振興事業団の皆様、また状況の変化で起きる様々な変更に対しても丁寧にご連絡・ご報告いただきましたキッセイ文化ホールの小市様に心から感謝いたします。

長野セッションは2019～20年度にかけて実施予定でしたが、コロナの影響をもろに受け1年延期を余儀なくされました。1年と言えど関係者を取りまく環境は様々な変化が生じるもので、その変化の中、事業を遂行するにあたってはアーティストのみなさんにも大変な決断と尽力をいただきました。Modétro Saxophone Ensemble (以下モデトロ) はそんな事情の中、フォーラム事業における「アウトリーチ研修 (通称キャンプ)」が始まるわずか10日前に結成していただき、このごく短い準備時間の中で出来ることをすべて行い、キャンプに挑んでくれました。

モデトロメンバーはフォーラム事業を経験した諸先輩方から「この事業は通るべき道」と助言されていたそうで、その意欲と期待は私の想像の上をいくものであったように思います。彼らは彼らに向けて発せられる一言一言を真摯に受け止め取り組んでくれました。

キャンプ中、アウトリーチでやってみたいことや子どもたちに伝えたいことなど、プログラムの芯となるものをあれやこれやと問われながら、自分たちの中にある臍げなものの輪郭を捉えようとされていたように思います。しかし、その輪郭を捉えたとして実際のプログラムに落とし込むにはさらなるハードルを超えなければなりません。子どもたちと過ごす45分を限られたレパートリー (何せ結成10日です) とトークでどのように構成すべきか。しかも音楽練習もしなければならない (何せ結成10日です) となると…。「俺たち間に合うのか! ?」という不安の中、ご飯のおかわりもままならなかったことでしょう。

とはいえアーティストの舞台人としての強さでも言いましょうか、何としても形にする底力を見せつけられ正直感動を覚えました。ただキャンプのキツさはまだこれから。アーティスト自身が自覚している違和感はもちろんのこと意識していなかった部分にも他コーディネーターらから意図の確認や助言をいただきます。プログラムの芯が頑丈であれば取捨選択できるのですが、全ての助言をクリアしようとするとう整合性がとれないことが生じ、「言われていることに対する正解はなんなのだろう?」と自分の外側に答えを求める方向に働いてしまうことがあります。アーティストの芯を見抜くと共に一番の味方になることもコーディネーターとしての大事な務めであると感じました。

安曇野市公演に入る直前にキャンプで作ったプログラムの再確認をし、曲順と曲目の変更を行いました。モデトロがやろうとしていることと音楽が語っていることとのズレを共有し、どうすればじっくりいくのかをメンバーで試行錯誤して出した答えには、プログラム内での楽曲およびトークの目的や子どもたちの中に芽生えてほしいものが明確になり、説得力が備わりました。またアーティストにとっては目的があることで、子どもたちの反応に臨機応変かつ適切な対応ができるようになりました。

安曇野市では堀金小学校の5年生全3クラスと6年生全3クラスにアウトリーチを実施しました。3日間同じ会場で行えるメリットは大きく、尻上がりに良くなりました。「良くなる」というのは非常に抽象的で数値化ができないのですが、うまくいっているときは子どもたちとアーティストの間に呼応があるとでも言いましょうか。自分の思いが相手に届いていると思える信頼関係のようなものが生まれ、なんとも心地良い時間が流れます。モデトロメンバーは回を重ねるごとにその見えない呼応を捉える力をつけていったように思います。

筑北村での筑北小学校においても安曇野市で得た力は健在でありましたが、こちらは1～6年生と年齢の幅が広く、低学年の子どもたちの「まだ知らないこと」の想定が行き届かなかったため、子どもたちにハテナを生じさせてしまいました。ただただ申し訳ない。しかしそのことをアーティスト自身が気づき短時間で修正をして次の時間に挑んでくれたことに頼もしさを感じました。

モデトロのみんなは気づいているでしょうか。先輩から言われた「通るべき道」は、自分たちが切り開いていることを。抱いていた期待は自らの努力でかなったことを。フォーラムの道を選択くださりありがとうございました。またお会いしましょう!

この事業のようにアウトリーチの研修を行う際には、まず演奏家に、「どんなことを伝えたいか・感じてほしいか」、「なぜ音楽をつづけているのか（なぜその楽器なのか）」、「音楽に携わっていることが自分にとってどんな意味をもつか」といったことを訊ねる。真正面から訊ねられてもなかなか答えにくいことかもしれないが、プログラムを構成する過程をとおして、演奏家があらためて自分自身の考えや気質、興味・関心などを自覚し、それをプログラムに活かしていくことがアウトリーチに取り組む際に必要だと考えるからだ。

若い演奏家の場合にはこの過程がとくに大切なのだが、クワチオール エランについては留学や演奏経験があり、最初のオンライン会議でグループとして目指すものが明確であることがわかった。

アウトリーチのプログラムを考える際に、“親しみやすさ”を考慮して編曲作品を組み込むことは多いが、コーディネーターとして考える選曲の目安のひとつが、作曲年代に関わらずその楽器編成のために書かれた作品を重要な位置におくことだった。演奏される楽器を念頭に置いて書かれた作品は、各楽器の特徴や重奏の響きなどが最大限に活きる音楽になっている、ということを感じてきたからだ。

ところが、エランのプログラム案は、サクソフォン四重奏のために書かれた現代作品が1曲、プログラムの中ほどに置かれていたが、アウトリーチ最後の言わば“聴かせどころ”には弦楽四重奏のクラシック作品を持ってきた。サクソフォンの誕生とほぼ同時代の作曲家ドビュッシーの作品ではあったが、その選曲を意外に感じて、サクソフォン四重奏のための作品を選ばなかった意図を訊ねた。

彼らからの説明は（言葉はうろ覚えだが）、サクソフォンという“楽器”を超えて、私たちはクラシック音楽の本質を伝えたい、というものだった。会議の際にはまだエランの演奏を聴いていなかったため、その考えには大いに共感するものの、それが実現された演奏を想像することはできていなかった。その後、録音を聴き、生の演奏を聴いて、その研ぎ澄まされた音色、緻密な重奏、自然に引き込まれる表現に魅了され、楽器編成に合わせたオリジナル作品を優先した自分自身の思い込みを反省し、サクソフォン四重奏を聴く（聴いてもらう）楽しみが大きく広がったと感じたものだ。

このことはアウトリーチに限らず演奏することの意味を考えさせるものだが、今回のアウトリーチのプログラムの、演奏はもちろん構成・演出も含めて、彼らの音楽についての洞察力が十二分に発揮されるものとなった。

今回は、コロナ禍のアウトリーチでもっとも効果を発揮する、子どもたちとの緊密なコミュニケーションの手法が一切使えず、どのグループも苦心したことと思う。そこで、子どもたちと十分な距離をとり、声を発するような応答を避けなければならない、という制約を逆手にとり、エランが選んだのはジョン・ケージ作曲の「4分33秒」という、まったく音を出さない作品をアウトリーチの中盤に組み込んだ。これはコンサートでも演奏したが、いずれの場合も聴いた人々に強い印象を残したようだった。

その他、サクソフォン四重奏のために書かれた、謎の言葉を発しながら演奏する作品では、その言葉を使っちゃったちょっとした芝居を導入に用い、また別の曲では目を瞑って聴くなど、コンサートでは各曲の照明にも演出を施すといった、耳で聴き、眼で見て、体感する工夫に溢れていた。

また、飯山市公演実施の約2ヶ月前に急速に全国の患者数が増加してきたため、小学校でのアウトリーチから急遽大人向けに変更しなければならず、しかし、結果としてエランにとってはこれも大切な経験となっただろう。アウトリーチは聴き手と同じ目線で演奏することが基本だが、日頃コンサートホールに出向く機会が少ないであろう障害者の方たちには、本格的なコンサートの形で演奏するほうが喜んでもらえるのではないか、というエランの共感力にも脱帽した。

加えて、ガラコンサートではメンバーのひとりが海外から帰国できず、引き受けてくれた演奏家はこ

れまでともに演奏した経験があるとはいうものの、急な代役にも関わらずエランの演奏にまた別の味わいをもたらしていたと思う。

いくつかの変更を余儀なくされたフォーラムだったが、なによりエランのメンバーは、あらゆる要素一つ一つに工夫や知恵を絞って熟慮を重ね、彼ら自身を魅了する音楽のすべてを余すことなく伝えたい、という思いの強さを持った演奏家たちだと実感した。エランの今後が楽しみでならない。

◆10月松川村での公演

4月にオンラインで行われた全体研修会の時から、担当の太田さんの松川村に対する強い想いと、この事業をより良いものにしたいという熱量を感じました。公演開催が2週間を切った9月末の時点で、長野県内の新型コロナ警戒レベル4（公演中止相当）という中、アウトリーチ先の小・中学校との密なやり取りを含め、公演に向けた制作を力強く進めてくださり、10月にレベル3に引き下がったことで無事に開催する運びとなりました。

アウトリーチは村内にある各1校ずつの小・中学校にて、各3コマずつ実施されました。1日目の中学校では、アウトリーチをご覧になられた校長先生がとても感動したと、急遽2日目午前には松川村の教育長や村長の視察、テレビの取材が入るほどでした。

2日目午後からは小学校でのアウトリーチ。終了後、対象学年が変わったことも相まってル・レーヴのプログラムを改めてブラッシュアップする必要があったため、終了後ホールに戻りミーティングが始まりました。急遽設けられた長時間のミーティングや翌日の練習スケジュール等の変動にも、太田さんを筆頭にすずの音ホールのスタッフの皆さまのあたたかく細やかなお心遣いに非常に助けられ、ル・レーヴチームにとっても成長させていただけるチャンスを作っていただきました。小・中学校の先生方も非常に好意的に受け入れてくださり大変協力的でした。「音楽を子どもたちに届けたい」想いもさることながら、長年にわたって松川村で生まれた太田さんと学校とのより良い関係性が、今回のアウトリーチにおける良い環境作りにも繋がっていると感じました。

当初からル・レーヴの3人が演奏したいとの想いで取り入れたラヴェル作曲「ピアノ三重奏曲」をメインに、ラヴェルと縁のある作曲家伊福部昭の「盆踊り」、松川村に住む人々が慣れ親しむ民謡「安曇節」が、アウトリーチとコンサート両方のプログラムに取り入れられました。特に「安曇節」は、休憩中に太田さんから踊りのレクチャーを受けたり、コンサートでは会場から口ずさむ声が聞こえたりと、その地域に根付きその場所でしか体感できないものを共有することができました。

◆1月茅野市での公演

下見で茅野市へ伺った時から、担当の山内さんをはじめ、茅野市民館のスタッフ（事業・技術・広報）チームの連隊感が非常に印象的でした。予定していたアウトリーチ6コマ全て異なる学校での実施に伴い、下見で6校へ出向く際も事業・技術スタッフに同行いただき、確認や記録を綿密に取られ学校の先生方とのやりとりが積極的に行われました。

しかし茅野市へ向かう道中に「コロナ感染拡大に伴い予定していたアウトリーチ全ての学校での実施が不可能になった」との連絡。茅野市民館に到着後まもなくミーティングを行い、伺えなくなった学校へ動画を制作して届けることになりました。急ピッチでリスケジュール、動画向けプログラムを練り直し、2日目に撮影のためのリハーサルと準備、3日目に演奏部分の撮影、4日目午前にMC部分の撮影、午後にコンサートのためのランスルーを行いました。

動画は茅野市民館のホール内だけでなく館内でロケーションを変えながら、カメラ3台を駆使して進められました。編集を考慮しながら限られた時間内で撮影が滞りなく進められ、まさに茅野市民館の強力なチーム感とこれまで培ってこられた技術や経験があられたからこそ成し得たアクティビティとなりました。その後、公演期間が終了した1週間後には編集された動画を共有いただき、双方向で確認作業を行い1月中には各学校へDVDを届けられ、2月ガラコンサートが開催されるまでには学校の子どもたちからの感想や質問を回収できるように…というスケジュールまで滞りなく進められました。子どもたちからいただいたたくさんの質問には、ル・レーヴの3人がそれぞれピックアップして回答し書面に

まとめたものを、山内さんから各学校へ届けられました。

コンサート開催の有無も感染状況を伺いながら、公演2日前に客席を1/3にして実施することが決定。12月の時点で既に予定枚数を終了したとのこと、広報担当者のチラシデザインや情報開示・広報のスケジュールなども綿密に立てられていたことが良い流れに繋がっていると感じました。

刻々と変わる状況の変化にも前向きに、きめ細やかに制作に取り組まれていた山内さんのもとで事業を進められたことで、公演制作の裏側を随時共有したり、舞台の裏方さんとの密なコミュニケーションを図ることができ、「普段演奏をするだけでは知ることができなかったことをたくさん知れた」というチェロの有梨さんの言葉から、公共ホールと演奏家が共同参画で作り上げる、ということを実感できた時間になったと思います。

モデトロサクソフォンアンサンブルは、10月に安曇野市、12月に筑北村に伺った。幸運なことにコロナによる活動制限が開始されたり解除されたりの間での開催であった。

安曇野市は観光資源が豊富で人口10万人弱。市内小学校が10校ある中、事業の枠組みであるアウトリーチ6コマ、対象人数が概ねひとクラス、そして学校内での公平性を加味して調整くださった。調整中、学校との信頼関係を大切にされていることとその関係の強さを感じた。

アウトリーチ一発目直前、下見でお話を聞いた先生に山本コーディネーターより演奏曲の説明をしたところ「思っていたのと違う」という先制パンチをくらった。先生ご希望の「サクソならではの曲」をプログラミングしてはいたが、先生のご希望に対する回収の分量が足りていなかった。下見時に、実施するプログラムと先生が持たれるイメージにズレを生じさせない丁寧なコミュニケーションが必要であった。しかし、アウトリーチプログラムの内容自体は楽しんでくださった様子であった。

コンサートチケットは早々に完売し、不安材料がひとつなくなった。アーティストから希望のあった現代楽曲の演奏にはPAが必要なため技術的課題があったものの前向きに検討いただき実現した。お客さまには初めて耳にする楽曲が多かったと思われるが、生の演奏を楽しもうとされている雰囲気とアーティストの小気味よいMCでとても良いコンサートになった。モデトロにとってこの公演がデビューステージであることをMCで気づかされ、ほんの数ヶ月前に結成された彼らがステージで惜しめない拍手を浴びているのを見、実施直前に異動された内山さんや突然担当となられた塩原さんが安堵されているといいなと思った。

筑北村は豊かな自然に囲まれ、長野市、松本市、上田市、安曇野市が通勤通学圏内にあり、穏やかな暮らしと利便性が共存する住み良いところ。人口4千人の規模ゆえか村内の人々の関係性が密な感があった。

筑北村では青柳さんが事業に関わる一切を一手に引き受けてくださった。電話をしても青柳さんとつながることはあまりなくメールもすぐにお返事はないので一人で二役三役を勤められていることは想像に難くなかった。しかし青柳さんから折り返されるご連絡は「調整済み」のご報告であり、なんの心配もなく制作進行できた。

筑北村では村唯一の筑北小学校に伺った。各学年1クラスであったため6学年全てにアウトリーチでき、村内全児童に出会うことができた。音楽の先生は全ての時間をご覧になり、「金管楽器」「弦楽器」「木管楽器」について低学年の子どもたちがまだ知らないことを受けて「ヴァイオリンありますよ」とのご提案や子どもたちがわかる言葉について助言いただいた。

安曇野市も筑北村も1つの学校で6つのアウトリーチを行え、ハードが変わらないことで転換の段取りにも変更なく、子どもたちに注げるエネルギーが増し、これはアーティストにとって大きくプラスに作用した。またキャンプ中は手探りで行っていたプログラム作りが、子どもたちを前にしてからさらに適応する軌道修正が彼らの姿勢を表していた。子どもたちがアーティストの一挙手一投足に反応し、それを逃さずキャッチすること。そしてそのキャッチしたものに適切に返していくことによって子どもたちとの距離が近くなること。

楽曲の解釈は様々なものであるが、出会った人同士の信頼関係の築き方は、そこに年の差などがあっても普遍的なプロセスを感じて興味深かった。

筑北村でのコンサートは役場に隣接した本城農村環境改善センター多目的ホールで行った。村の人にとってお馴染みのイベント会場。舞台がある体育館のような造りで、客席から見て舞台が少し高くかつ奥まっており、音響的にも前に出た方が良かったため、中学校から仮設舞台を借りてエプロンステージのように舞台を組むこととしたが諸事情でこの決定がコンサート前日。3日目のアウトリーチ終了後、

中学校に借りに行って準備することにした。しかしアウトリーチから戻ってきたら村役場の方々によってすでに舞台が組まれており、恐縮した。コンサート終了後のバラシの速さもすさまじく、筑北村役場のみなさんの機動力に恐れ入った。

安曇野市の内山さん、塩原さん、三澤さん、筑北村の青柳さん、若林さんら、まちに生き、まちを良くしたいと想う大人とそれを純粹に楽しむ子どもたちを見ることができた素敵な現場であった。また、コロナによる延期があり見通しのよくない状況下で、実現に挑戦した人々の「辛抱」や「粘り強さ」が予定通りの開催では発見できなかったものが皆さんにもあったのではないだろうか。

コロナ禍による影響は本事業においても例外なく影を落とし、最後まで翻弄されることとなった。その一方で、制約のある環境下でのアウトリーチ作りとその実施における各過程は、不安定かつ変化し続ける現代の社会情勢の中で、アウトリーチをはじめとした文化事業、あるいは音楽がどのような役割を果たしてゆけるのか、その意義と手法を模索する試みにもなったと思う。

◆Quatuor Élanについて

Quatuor Élan（以下、エラン）はメンバー4名がフランス留学時に出会い、帰国後の2018年に結成されたサクソフォンカルテットであるが、現在の活動拠点は富山、愛知、兵庫、ベルリンとそれぞれ異なる。しかし、半年以上ぶりの再会という彼らの練習では、瑞々しい感性や音色とその内に秘められた情熱がバランスよく一体となり奏でられ、正直度肝を抜かれた。演奏の説得力は十分、あとはプログラムをどのように組み立て、何をどのように子供たちに伝えるかが大きな課題となった。

◆アウトリーチプログラム作り

アウトリーチ研修前にエランのメンバーにはプログラム案を作成してもらい、その案を元にオンライン会議の場が設けられた。この会議では「サクソフォン＝大きい音、ジャズなどという先入観とは異なる音楽を」「このカルテットでしかできないプログラムを」との言葉通り、オリジナル曲や弦楽四重奏曲など意欲的な選曲による案が示された。同時に、今回感染症対策として「皆で声を出すこと」「子供たちの中に分け入っての演奏」ができない等の制約状況も確認された。

コーディネーターからコロナ禍対策による弊害をどのように克服するか、またこれを逆手にとって何か新しいプログラムを作れないか、等の問題提起もなされた。「アウトリーチプログラム作りの本質はアナリーゼにあり、それと共に自己分析が必要である」という言葉はアウトリーチ研修、実際のアウトリーチを通じて実践されてゆくことになる。

アウトリーチ研修ではトークの部分、また選曲した作品を通じて何を伝えたいのか、あるいはそのねらいについて深く掘り下げ話し合う時間が多く持たれた。具体的な意図を持って選んだはずの作品も、本質的な部分やその内容をさらに細かく問いかけると答えに詰まる部分が多く見られた。また話が広がりすぎてしまい収集がつかなくなることも。しかしながら、コーディネーターが答えと思われる結論を示すのではなく、あくまで彼ら自身の中から言葉として導き出されるのを忍耐強く待ち問いかけ続けることで、曖昧であった部分が明確になり、さらにプログラム中での各作品の位置づけ、前後の曲との関連性を踏まえての言葉選びや演出法も導きだし、アウトリーチプログラムの形が出来上がった。

各市町村の担当者の皆様も立ち会う中でキャンプ終盤に行われたランスルーでは、好意的な感想が出る一方で「完成されたプログラムゆえに隙がなく、聴き手が入り込む余地がない」「子どもとの共感を言葉にしてはどうか」などの指摘のほか、コロナ禍の制限を逆手に捉え選曲した「4分33秒」についても「子どもには難しいのではないか」との意見も聞かれた。

言葉選び等について再び悩むこととなったが、研修最終日のアウトリーチでは決められた原稿を定型のまま「文章」として読むのではなく、奏者の「本音」を織り交ぜた「言葉」として語りかける場面が随所にみられるようになった。

時間は掛かったが、迷い悩みながら模索し続けたこの過程は彼らの選曲に至った本質的な目的を明確にし、のちにアクティビティを通じてブラッシュアップする際の羅針盤になっていたように思う。「アウトリーチ作りはアナリーゼそのもの」という言葉の意味、楽曲だけに止まらずその分析を通じて自分

自身を見つめ直す作業によって作るべきプログラムが見えてくる、現場に立ち会いその変化を目の当たりにした。

◆事業実施とコロナ

コロナの感染拡大を受け、飯山市公演でのアクティビティ先の学校全校が辞退、ガラコンサートで国の感染予防への対応措置からメンバーが帰国できなくなり代演を依頼するなど、緊急の対応を迫られる場面が発生した。

特に、飯山市公演については公演が2ヶ月後に迫る中でアウトリーチ先をゼロから探さなければならぬ状況となってしまったが、事業を実現させるために担当の田中様が地域創造やコーディネーターと連携しながら多くの関係先に粘り強く交渉して下さり、タイムリミット間際まで新規アクティビティ先の開拓にご尽力された。その結果、まったく異なる客層と会場による組み合わせでの4回のアクティビティを実現することができ、エランのメンバーにとっては様々な経験を積める貴重な機会となった。

また、伊那市公演では受け入れ校の辞退はなかったものの、演奏家と子どもたちとの間隔、あるいは子ども同士の距離の確保についてなどコロナに対する対応が学校によって様々であった。各校ごとに示される方針とアーティストのプログラムに基づく要望を同市担当の北村様が中心となって丁寧に確認と調整を重ね、きめ細やかな情報共有によってすべての学校で混乱なくアウトリーチを実施することができた。

◆市町村公演

飯山市でのアクティビティでは前述のとおり、まったく異なる条件でアクティビティを4回実施したが、キャンプで作りに上げたプログラムをそのままに実施するのではなく、その環境や条件に適した形で変化をつけようと様々な「実験」を行った。

特に個人的に印象的だったのが、障がい者の就労継続支援事業所の方々に会館に迎えてのインリーチを実施する際の会場選択について。当初は会館の中央にあるフリースペースで行う予定であったが小ホールの利用も可能となり、「障がい者の方々が演奏会に行く機会が中々ないので楽しみにしている」という事業所の方の言葉を受けて「せっかくホールで演奏会を聴ける機会、その特別感を味わってもらう意味でも小ホールで実施したほうが良いのではないか」との結論に。「アウトリーチ」を形式的に捉えるのではなく、本質的な目的を理解できているからこそその意見であるように感じられ、とても感銘を受けた。アーティストのアイデアと会館の皆様のご提案、迅速な対応があったからこそ実現した場面となった。

伊那市でのアクティビティでは、学校ごとに異なる環境や校風を観察しながらその学校ならではのアウトリーチを模索し、ブラッシュアップを重ねた。アウトリーチ会場となった教室にあるもので活用できるものを探しては盛り込み、子どもたちが日頃過ごす空間の中でのアウトリーチをより身近に自分ごととして体験してもらえるように工夫がなされていた。

先述の4分33秒においては、当初は子どもたちにどのような音が聴こえたか質問したのちにメンバー自身も聴こえた音を挙げつつ身の回りにもいろいろな音楽があることを示していたが、子どもたちからの反応を蓄積する中で「実際には鳴っていないけど頭の中で聴こえてくる音、音楽」についても例示するよう変化を加え、作品の核心を子どもたちにわかりやすく伝えるものへと変化させていった。子どもたちにとって非常に印象に残る一曲となったようである。

トークにおいても丁寧な言葉選びの中にエラン自身の感情が次第に多く表れるようになり、選曲した各曲がそれぞれ意味を持って機能した結果、一見子どもたちに馴染みにくいとも思われるメイン曲「弦楽四重奏曲」について感想を述べる場面も多くみられ、エランの意図が子どもたちに確かに伝わっている様子が伺えた。

子どもたちが退室する時も一人一人が目を輝かせながら感想を口にする様子が印象的だった。

◆事業を終えて

研修開始当初は、問題解決の際にともするとコーディネーターに答えを求める傾向がややあったが、話し合いとアウトリーチでの経験を重ねるうちに、意見を求めることはあってもその答えを自分たちの中から導き出すことができるようになっていった。

エラン自身が多くの経験を積めたからこそではあるが、その陰では彼らが積極的に関係者の皆様との信頼関係を構築できていたことがなによりも大きかったように思う。何か事象が発生した時にすぐに確認作業や意見交換がしやすい間柄となっていたからこそ、様々な試みや変化にスピードを与え、そこから更なるアイデアへと繋がる好循環を生んでいた。ホールコンサートでは短いリハーサル期間で新しいレパートリーにも挑戦するなど新境地の開拓にも貪欲な4名、今回作成したプログラムをさらに洗練させつつ、新たな魅力的なプログラムもどんどん生み出してくれることを期待したい。

今なお終息しないコロナ禍によって、子どもたちが様々なことを体験し発見する機会は少なくなっている。しかし、機会が少ないからこそ感受性が鋭敏かつ豊かになっている側面もあるのではないか。今回の事業を通じ、また子どもたちの様子からもそのように感じられた。五感を通じてその感性に直接訴えかけることができる音楽の果たす役割は大きい。その中で、音楽家が独りよがりになるのではなく、音楽を通じて双方向のコミュニケーションができるプログラムを作り上げるため、音楽家とコーディネーターが対話を通じて本質的な部分まで掘り下げ、さらに地域と子どもたちと共に育てられてゆく本事業は、極めて貴重な機会であるとともに意義深いものであると確信する。

今回一年の延期を経ての事業継続を決断、そして事業の完遂のためご尽力頂いた長野県文化振興事業団の皆様、田中様をはじめとする飯山市の関係者の皆様、北村様を始めとする伊那市の関係者の皆様、ガラコンサートにご出演頂いた井上様、そしてエランの皆様に、心より感謝申し上げますと共に皆様のさらなるご発展とご活躍を祈念いたします。